

---

# 新・大都会の夜（改正版）

ズラえもん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

新・大都会の夜（改正版）

### 【Nコード】

N62070

### 【作者名】

ズラえもん

### 【あらすじ】

満月の夜、一人の女性が雑居ビルから身を投げたのを発端に、つづけて起こった理由なき投身自殺。謎に包まれたままの浮浪者暴行事件、そして身の毛もよだつ首切り殺人・・・事件の謎を究明するべく乗り出した警視庁捜査1課の柘園警部補の前に立ちはだかっただのは、はたして神か悪魔か？

## 謎の投身自殺（天使が舞った夜）（前書き）

この物語はY A H O O掲示板で集まった、私を含む仲間3人でリレー方式で書き上げた作品です！ 3人3様の個性と閃きだけで出来あがった作品でありながら、ストリはまずまずの出来だと感じたため、今回私が一人に加筆修正してみました。私の力量が足りないため読みにくいかわかりませんが、1読んでいただけるとありがたいです。

## 謎の投身自殺（天使が舞った夜）

### プロローグ

大都会の夜に、始まりもなければ、終わりもない・・・  
そして、そこに暮らす人の心には、けして明けることのない夜がある！

ある年の元旦・・・0時00分

ぐるりを山々で囲まれた、中国地方のとある山村の寺で、新しい年の幕開けを告げるべく除夜の鐘が打ち鳴らされた！

”ゴーン”という残響音が村中に響き渡るなか、境内の中央では護摩焚きの炎が赤々と揺らめき、それをぐるりと取り囲むように、誰からともなく村人達が輪になって座ると、やがて寺の僧侶が弟子の僧を連れて姿を現した！

村人達は誰一人として口を開く者はなく、一同が神妙な面持ちで見つめるなか、木箱を抱えた僧侶が炎の前に立ち神前に一礼すると、弟子の僧がお経を唱え始め、村人達は一斉に頭を垂れ手を合わせた。

こうして、神聖なるその儀式は始まったのである！

僧侶が木箱の中に収められていた品物（御札・お守りなど）を一つ一つ丁寧に取り出し、護摩焚きの炎の中に投じて行くと、そのたびに釜からは”ゴォォ”という音をたて火柱が上がる。

その炎が村人達の顔を真っ赤に照らし出し、腹の底に染み渡るような読経の声と、辺り一面に立ち込める線香の煙りに、村人達の中には陶酔し感涙するものもあり、寺の境内は厳かなる空気に包まれていった。

そして、村人たちのさまざまな思いを胸に、村の伝統である護摩焚きの儀式は順調に進んでいき、やがて僧侶が箱の中から最後の品を取り出した、それはお守り袋であった。

この村では御守りは、命を授かると同時に神から与えられ、満30歳を迎えた年に奉納し、こうしてお炊き上げを行うこととされているのである。

その年は3つのお守りが奉納されていた。

お守り袋の中には、人の五感を現す五本の糸が、護符に包まれた状態で収められており、僧侶は一本一本を自分の額の前に押しあて、祈りを捧げたあと炎の中に投じて行った。

こうして、儀式は滞りなく終わりを告げるように見えた。

だがしかし、儀式の最後となる五本目の糸を手にし、袋の中を確認した僧侶の顔が突然困惑の色を見せたのである！

なんと、そのお守りには、五本でなければならないはずの糸が、六本入っていたのだ！

僧侶は六本目を手に取り戸惑った・・・が、辺りを見ると、村人たちは目を閉じ一心不乱に祈りをささげている。

“村人たちをむやみに刺激してはいけない。”

あるうことか、騒ぎになる事を恐れた僧侶は、一瞬の迷いを断ち切るかのように“カツ”と炎をにらみつけたかとおもうと、存在を許されないはずの六本目の糸を、まるで何事も無かったかのように、炎の中に投じてしまったのである。

そのとき僧侶の手から離れた糸は、立ち上る炎とともに天高く舞い上がり、そのまま行方はわからないままとなったのであった！

## 第1章・謎の投身自殺

夜の大都会の片隅の、街灯の灯りさえ届かない、まるで吹きだまりのようなガード下で、薄汚れた屋台の椅子に座り、来栖健二（くるすけんじ 30才）は、ボサボサの頭を抱えながら、ため息混じりにボツリと呟いた。

“俺はいつたい、どうなっちまったんだ？”

その言葉は、酒に溺れたときの彼の口癖となっていた。

18才で岡山の山村を離れ、夢と希望を抱きこの町に来たまでは良かったのだが、どこでどう歯車が狂ったのだろうか、今では日雇いのその日暮らしに身を投じている。しかし、その頼みの綱である日雇いでさえ、身に覚えのない暴力事件の嫌疑をかけられ、ここ数日仕事にありつけないでいた。

油と指紋で、曇りきったコップの底に残った酒を、まるでなめるかのように飲み干した健二が、よろよると左右に身体を揺らしながら椅子から立ち上がると、夜空には満月が輝いており、無精髭に覆わ

れてはいるものの、持ち前の端正な顔が月明かりに照らし出されたのである！

その様子を物陰からじつと見つめる女がいた、その名は加島礼子（かしまれいこ 26才）。

白いスーツに身を包み、唇を噛み締めながら食い入るように見つめる礼子の目には、満月の光が反射し、青白い炎がゆらゆらと揺れているかの様に見えた。

“ やつと見つけた！ もう二度と見失なったりしない ”

自分に言い聞かせるように呟くと、礼子は時折吹き付ける秋風に逆らいながら、スーツの襟元を押さえ、駅のほうに向かいフラフラと歩き始めた健二の後を追ったのであった。

香坂かすみ（こうさかかすみ 25才）は、13階建ての雑居ビルの屋上に立ち、美しく輝く満月を見上げていた。

かすみの抜けるように白い顔が月明かりに照らされ、尚更の如く青白く浮かび上がり、その憂いをたたえた表情は、この世の者とは思えないほど妖しい美しさを放っている。

“ きれい！ あの日も今夜のように月がきれいだったわ。 ”

かすみの脳裏に、恋人との思い出がまるで昨日の事のようによみがえり、何も告げずに自分の前からいなくなった男に対し、思わず心の中で語りかけていた。

“健二！覚えてる？初めてのデートの夜、二人でこの場所に来たのよ。あなただったらお金も無いくせに無理しちゃって・・・！結局、デートの締めはここでコンビニのお弁当を食べたのよね。あなただったら“ごめんね、ごめんね。”って、何度も何度も謝りながら、それでも私の残したお弁当まで食べちゃうもんだから私おかしくって笑っちゃった！そしたらあなた、突然真剣な顔で私を抱き締めて・・・あの時が私の初めての・・・。”

かすみの目から一筋の涙が頬を伝った。眼下では、はるか彼方を夜行列車が光の線を描きながら、ゆっくりと近づいてくる。

それを確認したかすみは、金網を上りはじめ、苦労しながら金網の向こう側に出た。前にはもう何も障害物はない。

“あの列車が、このビルの横を通り過ぎたとき、私は天国で幸せになります！”

かすみは携帯電話を取り出すと、あらかじめ準備しておいたメールの送信ボタンを押し、そのまま金網から手を離すと、何も無い空間に向かい倒れていった。

一足先を携帯が音もなく落ちていく。

“さようなら”

そうつぶやき目を閉じると、かすみはまるで地上に舞い降りる天女のように、ゆっくりと線路脇の歩道に落ちていき、差し掛かった列車が、その音を掻き消していった。

健二の後を追ってきた礼子は、気づかれない様に観察を続けていた。

「かすみ・・・やっと見付けたわ、あなたの身も心もボロボロにし、あなたの人生までも滅茶苦茶にした男・・・来栖健二を・・・。」

礼子は独り言のように呟いた。

礼子は現在、小さな運送会社の経理事務をしている。礼子が入社したその次の年、向坂かすみが入社し、郷里が同じだった事もあり、二人はすぐに打ち解けあい、同じアパートに一緒に住むほどの親友になった・・・そんな時である、来栖健二が、かすみを誘惑して来たのは・・・。

礼子は、いつも仲良く寄り添う健二とかすみの姿を、ほほえましく見つめてきた・・・だが、いつのころだったか、かすみの顔からは笑顔が消えて行き、口数も少なくなつた！

「かすみ！ どうしたの？ このごろ何か変よ。健二さんと何かあったの？」

礼子が心配げにたずねると、かすみは決まってニツコリと笑つた。

「えっ！・・・別に何も無いよ。あるわけないじゃない。」

だが、その笑顔は明らかに不自然だった・・・

そしてその数日後、来栖健二はかすみの前から姿を消した。何も

告げずに・・・

礼子は、はっと我に返った。来栖がポケットから携帯を取り出して見ているのだ。どうやら、何処からかメールが来ていてそれを凝視しているらしい。

” あんな奴にメールをする人間がまだいたのか・・・！？ ”

礼子が思わずつぶやいたとき、メールを読み終えた来栖は、フラフラと建物の中に入って行った。そこは、表札に書かれた「臨港苑」という文字がかるうじて読み取れるアパート・・・と云うよりは、まるで放置され朽ちかけている、廃墟と言った方がふさわしいであろう建物であった。

窓ガラスのほとんどは割れ、そこから覗く垂れ下がったカーテンが風に揺れ、礼子の目には子供のころに行った遊園地のお化け屋敷のように映っていた。

“ こー・・・これがアパート？ これじゃ、まるで野良犬じゃない！”

礼子はニヤリと笑うと、携帯を取り出し、かすみの電話番号を押した・・・。

しかし、受話器から聞こえて来たのは“この電話は電波の届かない・・・” という、ガイダンスの声であった。

「もーう！ かすみったら何やってんのよ。」

ぶつぶつと呟きながら、何度も何度もリダイヤルを繰り返した礼子

だったが、結局電話はつながらなかったのである。

“まったく・・・！ まあいいか。 あいつの居所も突き止められた事だし、かすみにはアパートに帰ってから話そう。”

礼子は、携帯をスーツのポケットにしまうと、クルリと向きを変え歩き出した。

“それにしてもかすみ、来栖がこんな所で、野良犬みたいな生活をしてるって知ったら、いつたいどんな顔するだろう？”

あれこれと思いを巡らせながらアパートの前まで帰った礼子は、部屋に灯りがついていないことに気づいた。

“あれ？ かすみ、寝ちゃったのかな？ それともどこかに・・・”  
首をかしげながら鍵を開け、ドアを開く。

「かすみいゝ！」

返事がない。

「へんだなあ、こんな時間にどこ行ってんだらう？」

部屋に入ると、カーテンの開かれたままの窓から、光を投げかけていた満月に雲がかかり始めていた。

灯りを付け、礼子は冷蔵庫に取り付けられた伝言板に向かった。

それは、一人でどこかに出かける時にはそこに書き込もうと、礼子

とかすみお互いに話し合い取り付けた物だ！

「あっ！ 伝言がある。 やっぱりどこかに出かけて・・・ えっ  
！！」

伝言板に書かれた文字を見て、礼子の身体はまるで凍りついたかの  
ようにその動きを止めた！

そこには、見慣れたかすみの文字で “ さようなら ” と、たった一  
言だけ書かれていたのである。

「さ・さようならって・・・まさか、かすみ・・・！！」

一番考えたくなかったかすみとのラストシーンが、礼子の頭の中を  
駆け巡っていた。

翌朝、向井直哉刑事（むかいなおや29歳）は、一課の会議室で、  
大先輩である柘園茂男警部補（ますそのしげお 59歳）とテーブ  
ルを挟み向かい合って座っていた。

向井は、今年で3年目を迎えるまだまだ駆け出しの刑事ながら、I  
T機器を触らせれば天下一品、超が付くほどアナログ人間の柘園と  
は対照的に、警察手帳の代わりに携帯端末を持ち歩くほどのデジタ  
ル人間である！

テーブル上には、二人が線路脇の歩道から拾い集めた様々なものが  
並べられている。 向井はその中の一つを指差し言った。

「警部補！ 鑑識の結果、これは携帯電話の破片だということがわかりました。中でもこれはSIMカードといって携帯電話の情報が保存されている部分です！」

柘園は、白いものが混じりはじめた長めのもみ上げをつまみ、苦虫を噛み潰したような表情で振り返った。

「そのなんとかから何かわかるのか？」

「はい！ 通話履歴やメール文章などは本体側のメモリー領域に保存されていて、SIMカードにはその携帯の持ち主が、自ら情報を移動させなければ残りませんが、SIMカードというのは、そもそもナンバーポータビリティ・・・」

「おい！！ まてまて！ お前の話は私には理解できん。その・・・何とかというカードから何が分かるかだけを説明してくれ。」

向井はコクリとうなずくと、自分の携帯を取り出した。

「警部補！ 携帯電話のSIMカードというのはほとんどが世界共通なのです。」

そう言いながら向井はSIMカードを自分の携帯のものと差し替えた！ そして、しばしのボタン操作のち、向井はにやりと笑い、携帯の液晶画面が見えるように柘園警部補に差し出したのである。

「出ました！これがこの携帯自身の電話番号です！」

柘園警部補は無言で受け取ると、再びもみ上げをつまんだ。 それ

は考え事をするときの彼の癖であった。

「うゝむ・・・これがもし彼女のものだったとしたら、ここから身元を割り出すのは容易だな。」

二人の刑事はテーブルを挟んだままうなずきあった！

やがて、大都会の空が白み始め、柊園と向井はどちらからともなく、三階にある会議室の窓から街を見下ろしていた。

窓から見える道路脇の歩道には、黄色く色づいた銀杏の木が、秋風にザワザワと揺れており、その下を自転車で走る新聞配達の様があった。

その姿を見つめながら、向井がなぜか寂しげに呟いた。

「警部補！彼の配る朝刊には、自殺した彼女の事がどんな風に書かれてるんでしょうかね？」

「ん！うゝむ・・・マスコミのやる事だ！亡くなった本人の気持ちなど考えはせんよ。」

そう言って柊園は、眉間にシワをよせ揉み上げをつまんだ。

新聞配達の様が見えなくなるまで、黙って視線で追いかけていた向井が、気を取り直したように振り返った。

「警部補！朝飯の前に、俺はこれを返してきます。」

そう言って、鑑識から預かったSIMカードを手に、向井が部屋を

出ようとしたときだった。

”ガチャン”と音がして会議室のドアが開き、モジャモジャの頭を掻きながら一人の男が入って来たのだった。

ドアの向こうから顔をのぞかせたのは、柘園と同期の佐古田警部である。

「よう！ まっさん。朝早くからごくろっさん。」

「おう！ 佐古さん。あんたこそどうしたんだ？ こんな時間に。」

佐古田は抱えるように一冊のファイルを持っている。

「いや実はなあ、昨夜の飛び降り自殺の女の事なんだが、ありや裏に、単に自殺で片付けられん何かがありそうだぞ！」

「ん？ 自殺でかたづけられん？ そりゃいったいどういうことだ？」

佐古田が折りたたみ式のいすに腰を下ろし、目の前のテーブルにファイルを広げると、柘園もそれに倣い腰を下ろした。

「まっさん！！ あんたも鴨川公園の浮浪者暴行事件を知ってるだろっ？」

佐古田の問いかけに、柘園はもみ上げをつまみ眉間にしわを寄せた。

「浮浪者暴行事件？ ああ、あの6人の浮浪者が何者かに襲われた、

あれか？」

「そうだ！ あの事件は私が担当してるんだが、いまだ犯人のめぼしが付いておらんだ。」

そう言っつてファイルを開きながら、佐古田はもじゃもじゃの髪の毛をかき回した。

それを聞いていた向井が横から割って入った。

「浮浪者暴行事件で、2ヶ月ほど前に起こった、あの？」

「ああ！ どうもその事件に、今回の女が関わっているようなんだが、その前にまず暴行事件のほうから一応かいつまんで説明しておこう。」

肩を並べて座る、柘園と向井の顔を交互に見つめると、佐古田は真剣な表情で話し始めた。

「まずそのときの被害者は、リーダー格の山岸元雄（やまぎしもとお51歳）率いる、工事現場などの日雇い仕事を生業としている6人で、6人とも住所不定。 普段は先々の資材置き場などで寝起きをしておったんだが、その6人がたまたま鴨川公園で昼寝をしていたとき、公衆トイレ近くのベンチに若いカップルが座っているのを見つけたんだ！ それを見て、暇をもてあましていた連中のいたずら心に火がついたんだな。」

事件の要点を携帯端末に打ち込みながら、向井は大きくうなずいた。

「なるほど、そのときの犯人は確か、そのカップルの男だと聞いて

ますが、先に手を出したのは山岸たちだったんですね？」

「うん。だが不思議なことに被害者の証言がばらばらなんだ！カッブルの男にやられたと言うものもあれば、別の仲間が現れたんだというものもある。」

「目撃者はいないんですか？」

「いないんだ！！とにかくやつらは遊び半分で女をからかっていううちに、ついエスカレートしてしまい、女を守ろうとした相手の男がのびてしまったらしい。そこで“やばい”てんで逃げ出そうとしたとき・・・ここからが不思議なんだ！あるものは、のびてた男が突然立ち上がり、何かが乗り移ったかのように、ものすごく早い動きで襲い掛かってきたと言うし、一番軽症の山岸の証言だと、のびてた男ではなく、襲ってきたのはまったくの別人だったというのだよ！まあ、どちらにしろ被害者はこっぴどく殴られてるわけだし、記憶にあいまいな点があるのは仕方がないとして、たった一つ全員の証言が一致している部分もあるんだ。」

「たった一つ・・・？」

「うゝむ！それは、やつらがのびた男に背を向け逃げ出そうとしたとき“この女は私の獲物です”という言葉と“お前死ねっつ！”という、背筋が冷たくなるような、なんとも不気味な響きのある男の声を6人全員が聞いている。」

「不気味な声か・・・」

しかめっ面でそう言った、柊園のもみ上げを引っ張る指に力が入った。

佐古田が身を乗り出し続ける。

「正直この事件は、暗礁に乗り上げかけていた・・・だがそれも今回の証言で進展が見られそうなんでな、それでまっさんに知らせようと、朝飯も食わずに駆けつけたってわけだ。」

「今回の証言というと？」

「実はたった今、暴行事件の被害者の一人・・・ああ、やつらまだ入院してるんだ。どうせ保険金か何か目的で引き伸ばしているだけだろうが、そのうちの一人でリーダー格の男、山岸から私のところに電話が入ったんだ！ やつが言うには、病院のベットで朝一のワイドショーを見ていたら、昨夜の飛び降り自殺の事件が流れ、そこに映し出された死んだ女性の顔が、暴行事件のときのカップルの女とそっくりだというんだよ！！！」

窓から差し込む朝の光が、真剣なまなざしで見つめ合う、三人の刑事の顔を照らし出していた。

つづく

## 二重人格

### 第2章・二重人格

捜査一課を訪ねてきた加島礼子への接見及び事情聴取が、柘園警部補とその直属の部下である向井刑事の手により行われ、その証言とSIMカードの携帯番号から、飛び降り自殺をした女は香坂かすみであるとの判断が下された。

しかし、香坂かすみは鴨川公園での浮浪者暴行事件に関わっている可能性が高く、佐古田警部は単なる自殺では片付けられないと言いつ、かすみの親友である加島礼子もまた、かすみの自殺説には否定的であった。そして礼子の話を聞くうちに、浮浪者暴行事件の有力容疑者として、現在行方不明となっているかすみの元彼である来栖健二の名が浮かび上がったのである。

そこです、香坂かすみが他殺である可能性を確かめるべく立ち上がった、柘園・向井両刑事は、かすみが飛び降りた雑居ビルの屋上に立ち、フェンス越しに下を見下ろしていた。

二人の視線の先には歩道があり、その数メートル先を線路が隣接するように走っている。

かすみが倒れていた歩道にはたくさんの花束が積み重ねられており、それを無言のまま見つめていた柘園が揉み上げをつまみながら呟くように言った。

「向井！ お前はかすみさんの死が単なる自殺ではないと言った佐古田警部の意見をどう解釈する？」

「はい・・・」

柀園の問い掛けに、向井は目の前のフェンスに手をかけ、小さく揺り動かす仕草をして見せた。

「検死の結果、かすみさんの身体にはかすり傷ひとつなく、死亡原因は飛び降りた事による内臓破裂と断定されています。」

そう言いながら、向井は真剣な表情で柀園を振り返り続けた。

「警部補！ 彼女がもしどこか別の場所で殺害され、何者かの手によりこの場所から投げ落とされたならまだしも、かすり傷ひとつ負わずこのフェンスの向こう側に自分の意思以外で立たせるのは無理ではないでしょうか？」

「うむ・・・私も同じ意見だ！ アパートに残された」さようなら」のメッセージは加島礼子に宛てた遺書とみて間違いないだろう。だが向井、彼女が仮に自殺だったとしてもだ、人が死を選ぶにはそれなりの理由があるはずだ。」

柀園は再び歩道に視線を移し、苦虫を噛み潰したような表情で揉み上げをつまんだ。

「ところで臨港苑へ向かった小林刑事からは何か連絡はあったか？」

「はい！ 小林君の電話では建物内には来栖どころか人つ子ひとり見当たらず、来栖が寝起きしていたと思われる部屋に侵入したところ、布団と酒の空き瓶くらいしかないものの、確かに生活感を感じられたということでした。」

「うむ・・・で、臨港苑の所有者は？」

そう言つて眉間にしわを寄せる枡園に歩み寄つた向井は、胸ポケットから取り出した黒い電子手帳を開いた。

「えっと・・・臨港苑は5年ほど前までは10人ほどの入居者がいて道路に面した位置にはレストランもあったようです。当時の持ち主は波多野新平はたのしんぺい88歳でしたが、彼が心臓病で急死したため臨港苑は閉めたそうです。そのため登記上の現在の持ち主は波多野守5はたのまもる1歳、波多野新平の実の息子となっています。」

「それで波多野守からは話が聞けたのか？」

「いえ！それが波多野とは連絡が付かず、電話口に愛人らしき女が出て、聞くところによると半年前に仕事でニューヨークへ行くと言つて出て行つたきり音信不通となっているとのことでした！」

「音信不通？・・・まあいい、来栖健二の姿はかすみ飛び降りた夜に加島礼子が目撃してある、そう遠くには行つてはおらんだろう。」

「ええ、しかしそれだけの理由で本当にそう言い切れるでしょうか？」

「ん！それだけじゃない、理由ならほかにもあるぞ。考えてもみる、奴は日雇いで食っているんだ、仕事にありつくには馴染みの日雇い派遣業者が多いこの町のほうが都合がいいんだよ。来栖健二は必ずこの町にいるぞ。」

「なるほど……」

向井が枳園の考えに感心したように、小さく何度も頷きながら、胸のポケットに電子手帳をしまっていると突然背後で女の声がした！

「刑事さん!!」

二人が振り向くと、そこには加島礼子が花束を手に立っていたのである。

向井が歩み寄った。

「あっ！ 先程はどうも…… かすみさんにお花ですか？」

「はい、下の歩道にと思ったのですが、警備員の方がこちらに刑事さんがいられていると教えて下さったもので。」

「そうでしたか、それで私達に何か？」

「はい、かすみに手を合わせた後で警察の方へうかがうつもりでしたが……。」

言いながら、礼子はショルダーバックから一枚のDVDを取り出し向井に手渡したのである。

「実はかすみの御両親が荷物を引き取りに来られるということであれからアパートに帰って片付け物をしてたんです、そしたらかすみの部屋のごみ箱の中からこれが……。」

それを側で聞いていた枳園のこめかみがピクリと反応した。

「加島さん！ その・・・ビービーなんか・・・」

「DVDです、警部補！」

「あ・ああ・・・そのビービーデーのことですが、かすみさんの部屋のごみ箱の中にあつたのですね？」

柊園は向井の横に立ち、礼子の目を見つめた。

「は・・・はい。」

「そうですか・・・で、あなたはその内容をご覧になったのかな？」

そう言つて柊園が、礼子の顔からまるで何かを読み取るうとするかのように見つめながら、眉間にしわを寄せ揉み上げをつまむと、礼子は一瞬視線をずらす様にうつむいたが、すぐに気を取り直し、まるで何かを決意したかのように柊園の目を見つめ返し、大きくうなずいて見せたのである。

「はい！ 見ました！ ですが内容については私の口からはとても・・・でもこれだけははっきり言えます、かすみは・・・かすみは来栖に殺されたんです！」

「来栖に？ 殺された？・・・このDVDには何かその証拠でも？」

思わず驚きの声を上げた向井に、礼子は悲しそうな表情で左右に首を振った。

「いいえ、それはわかりません、あとは刑事さんがご自身でござらん

「になって下さい。」

礼子はそう言つて二人の刑事にクルリと背を向けると、持っていた花束をフェンスにそつと持たせかけたのであつた。

涙を溜め、両手を合わせる礼子と、それを見守る二人の刑事・・・。

誰も動きを止めた雑居ビルのフェンスを、ヒュルヒュルと秋風が鳴らし、遙か眼下を電車がゆっくりと通り過ぎて行つた。

雑居ビルを出た枅園と向井は、署で落ち合う約束を交わすと二手に分かれ、向井は同期の小林刑事から、来栖健二をひいきにしていた日雇い派遣業者がいるとの情報を受け、町外れの建設現場に向かつた。

そこには、来栖健二を日雇いとして雇つていた、現場監督で田村という50半ばの、いかにもガサツそうな小柄の男が待つていたのである。

向井が簡単に挨拶を済ませ、来栖健二について聞きたいことがあると告げると、田村は向井に手招きし、小さな仮設事務所へと案内した。

「汚いところで申し訳ないが、まあその辺に掛けてくださいな。」

向井が勧められた木製の長いすに腰を下ろすと、田村はタバコに火をつけ話し始めた。

「来栖ねえ・・・あいつにはこここのところ仕事を与えてないですよ。あいつは仕事もできるし真面目なんだが、なんか気持ちが悪くてなあ！」

「気持ちが悪いとは、いったいどういう意味なんでしょう？」

言いながら向井は黒い電子手帳を開いた。

「ああ、本当は来栖もこの現場に入れるつもりだったんだが、あいつはねえ、突然意味もなく切れやがるんですよ！」

「切れる？」

「ああ、俺のところへ来るようになった最初のころは、そんな素振りさえなかったんだけど・・・それさえなけりやなあ・・・とにかく今手がたらねえんですよ。鴨川公園の浮浪者暴行死事件、刑事さんも知ってるでしょう？ やられた浮浪者ってのは俺のところで世話してた奴らでしてね、ねぐらこそ持たない連中でしたが、現場ではまじめで信頼できる連中でした！」

向井は思わず身を乗り出した。

「えっ！ あの浮浪者たちがこちらで・・・ということとは、あの6人と来栖は顔なじみだったわけですね？」

「いや、それはどうか？ 現場に入れば誰と誰が・・・てのはわからないねえ！ 道中の車の中も、ろくに口を聞く者はいませんか。」

「そうなんですか・・・」

「何なら刑事さん、もうすぐ3時の休憩ですから直接作業員に聞いてみますかい？」

こうして、田村の計らいで数人の作業員と会った向井だったが、作業員たちからは来栖健二についての新たな情報は何一つ得られなかったのである。

一方、向井が建設現場に居るころ、柘園はひとり国立病院の門をくぐっていた。

辺りを見回しまるで世間の目から隠れるように！

診察台に起き上がり、ワイシャツのボタンをかける柘園に、掛かり付けの担当医師がカルテにペンを走らせながら言った。

「柘園さん！ 悪いことは言いません・・・一度きちんと調べてみましょう！」

柘園は揉み上げを弄りながら苦笑いを浮かべると「ああ・・・まあその内にね。」と気の無い返事をする。

そんな柘園のまるで他人事のような態度に、担当医師は苛つきを隠せないといった様子で声を荒げた。

「柘園さん！ いい加減にしてください。あなたいつもそうだ。

その内にとって・・・このままほおって置くと、後で取り返しの付

かない事にもなりかねませんよ！」

そう言つて、真剣な眼差しで見つめる担当医師の言葉が聞こえないかの様に、柘園は軽く頭を下げると無言のまま診察室を出ていき、病院の門のすぐ脇にあるバス停のベンチに座り煙草に火を付けた。

宙を見つめ煙草の煙を胸いっぱい吸い込み、ゆっくりと吐き出すと、煙は風に吹かれ渦をまくように空中へと消えて行く……。

それを視線で追いながら、柘園は揉み上げをつまみ“ポツリ”と呟いた。

「フツ・・・やぶ医者め、人を病人扱いしおつて。」

そこにバスが到着しドアが開いた。

しかし柘園は一点を見つめたまま動かない……。

「乗らないんですか？」

バスのスピーカーから運転手の声……。

”ハッ“とわれに返つた柘園が、右手を左右に振り乗らない意思を運転手に伝えると、バスはエンジン音を響かせ走り去っていった。

そして数分後……柘園が去つたバス停の灰皿には、処方された薬が手付かずのまま放り込まれていたのであった！

時を同じくして、加島礼子は、かすみの遺体をひきとりに来ていた両親と会っていた。

手続きを済ませ、まるで魂が抜き取られたような表情で署から出てきた両親に、礼子は深々と頭を下げた。

「ごめんなさい！ あの日、私がかすみのそばにいらなかったばかりに・・・こんなことに。」

そんな礼子に、母親は左右に首を振りながらやさしい口調で言った。

「加島礼子さんですね！？ かすみはあなたと友達になれたことを大変喜んでました、あの子からの手紙にはかならず礼子さんの名前が出てきていたくらいです。」

父親もすかさず歩み出て、言った。

「礼子さん！ かすみが自殺だなんて・・・私たちには信じられませんが！」

「私も信じていません！ ですが、お父さんお母さん、とにかく今はかすみを早く皆さんのところへつれて帰ってあげてください。」

悲しみを分かち合う3人は互いに手を取り、人目もはばからず抱きあっていた。

別行動をとっていた柊園と向井は署に戻り落ち合うと、その足で宿直室に向かった。向井は脇にノートパソコンを抱えている。

向井は部屋に入り畳の上に腰を下ろすと、パソコンのスイッチを入れ、冷蔵庫から缶コーヒーを取り出すと柘園に手渡した。

「おお、すまん！」

柘園が受取ると、向井は言った。

「警部補、この街の日雇い派遣業者の所を手当たり次第に当たってみたのですが、最近はこの現場でも来栖健二は雇っておらず、現場で顔を合わせる派遣仲間さえ仕事外の付き合いはなく、奴の素性を知るものは誰ひとりとしていませんでした！」

「うゝむ・・・そうなると奴は収入減を断たれていることになる、食うためにはいつまでも隠れているわけにもいかんだろう。」

そう言つて柘園が揉み上げをつまんだと同時に、向井がDVDの再生ボタンを押した。

そして、画面に映し出された映像に、二人はしばし言葉を失い、驚きとともに顔を見合わせる事となつたのである！

なんと、そこに映し出されていたのは、二人のやくざ風の男に弄ばれる、香坂かすみの姿だったのだ。

男たちのなすがままにされるかすみの目は一点を見つめ、声も上げなければ抵抗もしない・・・明らかに薬物で意識がはっきりしていないのが、その様子からうかがえる。

我に返つた柘園が、モニターを指差しながら言った。

「向井！　そこに映っている片方の男は、間違いなく暴力団　富士見会若頭の秋葉あきは　剛こうだ。　うゝむ・・・自殺したかすみは富士見会とつながりがあったのか！？」

そう言うと柘園は、飲み干した缶コーヒーの空き缶を目の前のテーブルの上に　“タン”と音をたてて置き、宙をにらみつけながら揉み上げをつまんだ。

二人の間に緊迫した空気が流れ、衝撃の映像を目の当たりにした二人はしばし無言のままの時間を過ごした。

そして数分後、思い出したように向井が言った。

「警部補！　富士見会の噂は聞いていましたが、秋葉が仕切るようになってますますやり方が悪どくなっているような気がしますね。」

そう言った向井の脇をすり抜けるように、柘園は立ち上がり無言のまま宿直室を出ると、そのまま屋上へと上がって行った。

「け・・・警部補どちらに・・・」

向井も慌ててそれに続く・・・

コツコツと靴音を響かせ階段を上る柘園の後ろ姿が、向井には心なしか悲しげに見えた。

二人が屋上に着くと、眼下の街ではネオンが輝き始めており、柘園は夜空を見上げたあと、ゆっくりと向井を振り返り言った。

「向井！ お前はあの映像を見て何を思った？」

「えっ……！ そ・それは……かすみさんが……」

「そうじゃない！ 私が聞いているのは、あの映像を見て何か違和感を感じなかったかってことだ。」

「違和感!?!」

柊園の突然の問い掛けに一瞬言葉を詰まらせた向井だったが、すぐに気を取り直し言った。

「あっ！ そういえば、ちょっと不思議に感じた事がひとつだけあります！ それは、あの映像を見た加島礼子が何故 “ かすみは来栖に殺された ” と言ったのか、ということ。 もしも礼子があるを初めて見たのであれば、かすみは秋葉もしくは富士見会に殺されたと言うのが普通じゃないでしょうか？」

「その通りだ！ 礼子はあのビービー……！」

「DVDです！」

「ん！ ああ……そいつを最初に私たちに会った後アパートにいったん帰り、部屋を片付けていてごみ箱から発見したと言った。」

「はい！ 確かにそう言いました。」

「その言葉にすでに嘘がある！」

そう言って柊園は眉間にしわを寄せ、これ見よがしに点滅するネオ

ンサインをわずらわしそうに覗みつけた。

「えっ！！ 嘘？」

「そうだ、礼子は最初に私たちを訪ねて来た時シヨルダーバックを手にした・・・二度目に屋上で会った時持っていたのと同じものだ！ そして私が椅子を進めるとそのバックを身体の右側に置いた・・・そのとき偶然だが私の目にバックから覗いたビ・・・あ・・・いや・DVDが見えたんだ。 蛍光灯の明かりに照らされ虹色に輝いていたためはつきりつと覚えている。 彼女はあのとすすでにDVDを持って来ていた、おそらく私たちに見せるためだ、それなのになぜ何も言わなかったんだ？」

そう言つて柀園はもみあげをつまみながら向井を振り返つた。

「あゝ・・・警部補それは多分女心つてやつですよ。 仲の良かったかすみさんのあんな映像を見せるべきかどうか、心の中で葛藤があつたのだと思います。」

「いや違う！ さつきお前は礼子が “ かすみは来栖に殺された ” といったことを不思議だと言つたな？」

「ええ、確かにそう言いましたが・・・」

「礼子は早い段階からあの映像の存在を知っていた、そして富士見会と来栖健二が関わっており、あのビデオを撮るにあたり、来栖が富士見会に何がしかの協力をしていることを知っているんだ！」

「それで彼女は “ かすみは来栖に殺された ” と？」

「それだけではない、彼女自身も富士見会と何らかのつながりがあるはずだ！ だから最初にあの映像を見せるべきかどうか悩んだ・  
・見ればそのことが知られてしまうからな。礼子は何か我々に知られたくない秘密があるため最初に会った時には出すことが出来なかつたんだよ。」

眉間にしわを寄せもみあげをつまむ柘園と、その顔を見つめる向井・  
・向かい合う二人の刑事の頭上では、少し欠けた月が青白く怪しい光を放っていた。

秋葉 剛は酔っていた。

15歳で上京したものの、毎日がうまくいかず、喧嘩に明け暮れる日々を送っていた秋葉だったが、ひょんなことから知り合った富士見会会長に拾われ、今は関東一円を牛耳る暴力団 富士見会の若頭を任されるまでになっていた。

歩行者天国でにぎわう商店街の横断歩道を、肩をゆすりながら歩いていた秋葉は、ドン という音とともに誰かとぶつかったのである。

見ると、無精ひげを生やした優男（やめおとこ）が怯えた目をして秋葉の方を見ている、年の頃は30前後で、秋葉が何者であるかを察したように不安が顔全体を覆っている。

しかし、その顔は整っており、女を引き付ける何かを持っている顔立ちだった。と同時にそれは秋葉のもっとも嫌いな顔立ちでもあった。

「おい！ てめえ、どこ見て歩いてんだ。」

「す・すみません・・・」

そう言つて相手が軽く頭を下げ立ち去ろうとした・・・そのときだった。

「まてい！」

秋葉の右手が男の肩を掴んだのである。

「何か・・・？」

相手の男が振り向いた瞬間、無言のままの秋葉の右ストレートが、男の顔面に決まっていた。

“バキーン！！”

それは強烈な一撃であった・・・男はもんどりうって倒れたかとおもうと、交差点の真ん中で大の字になりピクリとも動かない。

“死んだんじゃないのか!?” “救急車・・・救急車” と、野次馬が騒ぎ出すなか、秋葉が“ペツ”と唾を吐き、その場を立ち去ろうとしたその時である・・・!!

「待ちな！ このクズ野郎！」

群衆の声に紛れ、どこからともなく秋葉を呼びとめる声が聞こえたのである。

秋葉が振り向いたが、声の主は分からない。

「誰だ！」

そう言つて辺りを見回し、倒れた男の方に視線を移した秋葉の目に信じられない光景が写つた。

なんと、大の字に伸びていた男が、まるで人が変わったかのごとく俊敏な動きで上半身を起こしたのである。

立ち上がった男の口が動いた。

“まったく！ 健二よお、お前さんは女も喧嘩も駄目なんだから・・・ここは俺様に・・・”

男は独り言のように呟くと、今度は茫然としている秋葉を睨みつけ、どすの利いた声で言つた。

「お前・・・死ねえ！」

「なっ・・・なに？」

“こいつは、何者なんだ・・・？ さっきまでの男とはまるで別人のようだ・・・！”

ひげ面の優男だったはずの男の顔はどす黒く変色し、その目は大きく見開かれ充血で真っ赤に染まっており、口元をひくひくとひきつらせながら、まるで鬼のような形相でゆっくりと近づいてくる。

その様子に秋葉が得体の知れぬ恐怖を感じ、一步後ろに下がったその時である。

迫って来ていたはずの男の身体が、まるで雷にでも打たれたかの如く“ピクン”と身を躍らせたかとおもうと、突然頭を抱えその場につくりと膝まづいたのである。

「うつうつ」

うずくまった男の口からはうめき声が漏れた！

そして、なんと不思議なことに、鬼のような形相だったその顔がみるみるうちに一変し、元の優男に戻っていくではないか。

“ありやなんだ？” “何かのパフォーマンスか？” “おおかた見世物小屋の客寄せだろう。”

好き勝手なことを並べながら、通行人たちが好奇心な目で見つめる中、男は苦しそうにうめき声を上げつづけた拳句、誰もいないはずの方向に向かい、絞り出すような声で訴えかけた。

“うつうつ・・・やめる・・・やめてくれ・・・お前は一体誰なんだ・・・？”

空中に語りかける男の姿を目の当たりにした秋葉の背中を冷たいものが駆け抜けた。

「こ・・・こいつは俺が呑み過ぎてるのか？ それともこの男は化け物なのか？」

想定外の出来ごとに秋葉は身動きが出来なくなり、男のあまりの豹変ぶりに周りを取り囲んでいた野次馬たちもざわめき始めた。

“おい、やばいぞ！” “どうなってるんだ？” “関わらない方がいいんじゃない？”

さまざまな声が上がると、突然うずくまっていた男が叫び声を上げた！

「うわっっっ……！！」

その途端、近くに集まっていた野次馬たちが蜘蛛の子を散らすかのように一斉に逃げ出したのである。

その様子に “はっ！” と我に返った秋葉は、逃げ出した野次馬たちに紛れ込みその場から姿を消したのであった。

こうして人がまばらになった商店街……それでも男は、うずくまったりめき声を上げ続ける。

「うっっっっ……うっっっっ……」

そして数分後、頭を抱え込んでいた男の手がゆっくりと下ろされると、まるでその時を待っていたかのように、遠巻きの野次馬の中から二人の女性が心配そうな表情で男に近づいてきたのであった。

見たところ二人の女性はどこかのOLだろうか？ 二人ともパンツルックで白いブラウスに紺色のカーディガンを羽織っており、一人は小柄で、もう一人はそれとは対照的にふくよかな体系をしている。

小柄なほうの女が、大きな目をくりくりと動かしながら言った。

「あの……だいじょうぶですか？」

「……」

男は答えない。

「救急車呼びましょうか？」

「え！」

女の問いかけに男がハツとしたように顔を上げ、慌てて左右に首を振ると言った。

「あ……いや……大丈夫です。ちょっとめまいがただけで、もう治まりましたから。」

言い終わると男は立ち上がり、逃げるようにその場を後にしたのであった。

“俺は何で此処にいるのだろう……” 秋葉は思った。

高層ビルの屋上に、今自分は立っている。金網を登って向こう側に出る。もう、秋葉の前には障害物はない。

“何かがおかしい……！” 秋葉は自問自答を繰り返していた。

少し欠けた月が美しかった。

“月が美しい・・・?? なぜ俺が、そんな事を思っただ。”

“お前・・・死ねえ!” どこかで聞いたような言葉が、秋葉の頭の中で響く。

その直後、秋葉は両手を広げ、ビルの屋上から思い切りダイブしていた・・・!

その横を、1本の光の線を引きながら、最終電車が通り過ぎて行った。

来栖健二は叫び声を上げながら見知らぬ街をひたすら駆けていた。

“やめろ〜 来るな・・・来るな・・・これは俺の身体なんだ、お前なんかの自由にさせてたまるか〜 俺は化け物なんかになりたくない!!!”

恐怖に耐えきれず、迫りくる何者かに向かい腹の底から叫んだそのとき、来栖は臨港苑の地下室で目を覚ましたのである。

額からは汗が吹き出し、喉はからからに乾いていた。

「なんだ?! 夢だったのか・・・???!」

安堵感に胸をなでおろした来栖は、何気なく後頭部に手を当てた。

「はっ！　こ・これは・・・！」

後頭部には鋭い痛みがはつきりと残っている。

“あれは夢なんかじゃない！　この後頭部に残る痛みが、昨夜の出来事を物語っている。あるとき俺は・・・いや俺の中の化け物が、やくざ者を殺そうとしていたんだ。”

「お・俺は・・・俺はいつたい！」

来栖は鈍い痛みが残る後頭部をさすりながら、かすみが言っていた言葉を思い出していた。

“前にかすみと言っていたのは、本当だったんだ・・・。　そういえばあの日、俺は熱を出しアパートでうなされていた。目の前はぼやけ喉は焼けるように痛んだ！　半分ほど開いた窓から聞こえてくる都会ならではの喧騒が、俺の頭の中でエコーがかかったように響いている・・・どのくらい眠っただろう、目を覚ますとかすみがあった！”

「熱は下がったみたいね・・・私帰る！」

そう言ったかすみの態度は、やけによそよそしい、少し怒っているようにも見える。

「どうしたんだ？　俺に何か怒ってる？」

俺が尋ねると、かすみはハンカチで涙をぬぐいながら哀しげな表情で俺を見つめた。

かすみが言うには、枕元に座っていた自分に、俺が突然起き上がり、まるで人が変わってしまったかのように、理由もなく何度も殴りつけたというのだ・・・そんなことが後にも何度かあった！

もちろん俺には何のことかわからない、俺はかすみを殴ったりしない・・・かすみは俺の命なんだ。いや・・・まてよ！ そういえば以前勤めていた商事会社でも、現在の日雇いの仲間たちからも、理由もなく突然暴れだしたなどと、覚えのない嫌疑をかけられた事もある。”

来栖は自分の考えに恐怖した。

“俺の中に何か居る！俺は二重人格なのかも知れない・・・”

つづく

## 二重人格（後書き）

いちどアップしたものの納得がいかず、あらためて上げなおしました。

## 悪魔のささやき

### 第3章・悪魔のささやき

警視庁の建物の屋上にある喫煙スペースで、柘園と向井はスタンダード型の灰皿を挟む形で備え付けられたベンチに、向かい合って座っていた。

そこは四本の支柱に雨避けのためのスレートが取付けられただけの簡単な造りとなっており、壁がないため夜の街が一望でき、遠くに見える高速道路では車の明かりが、まるで細長い生き物のようにクネクネと身をくねらし、はるか上空からは少し欠けた月が雲の間から顔をのぞかせ、二人の刑事の横顔を照らし出している。

瞬く街を見つめながら柘園がゆっくりと煙草の煙を吐き出したとき、階段の方向から物音が聞こえ、二人が振り返るとちょうどドアが開き、禁煙パイプを口にくわえた中村課長が入ってくる場所であった。

中村課長は二人に気付くと、ヒョイと右手を挙げ言った。

「よう、まつさん！ 姿が見えないと思ったらやっぱりここだったか。」

中村は年齢で言えば柘園よりもひとつ年下、だが見た目は四十代と言っても誰も疑わないほど若く見える。

「おや！ 課長まだいらしてたんですか？」

「ん？ ああ・・・帰ってもかみさんと娘は旅行に出掛けてて誰も

おらんしな・・・まったく、寝る間もないほど働いている亭主をほつたらかして、気楽なもんだな女ってやつは。」

そう言つて笑つた中村課長の横顔は少しさみしそうに見えた。

そんな中村の言葉に、枳園が短くなつた煙草を灰皿で揉み消しながら言つた。

「何をいまさら、あんたらしくない。」

「ん？ ああ、こりや失敬。」

そう言つて中村は気を取り直したように枳園を振り返り、続けて言つた。

「実はここに来たのはほかでもない、あれから臨港苑の持ち主である波多野守から連絡があつてな、来栖について尋ねてみたんだが、そんな名の入居者はいないし、臨港苑はすでに取り壊しが決まつていて、契約していた入居者は全て別のところに引っ越してるので、今は誰も住んでいないと言つんだ。」

「やはりそうか、奴は廃墟となつた臨港苑に勝手に住みついてたんだな！」

「まつさん、来栖はもうあそこにはいないと考えたほうがいいんじゃないか？ 何しろ電気もなければ水道さえ使えないんだからな。」

おまけに窓は割れ放題に割れているし、それだとこの時期夜は冷えるぞ。」

「うゝむ・・・まあ来栖の奴は収入源を立たれてるし、そのうち何処かにのこのこ現れるだろう。それより課長！今向井とも話してたんだが、明日にでも秋葉を締め上げてみようかと思ってるんだ。」

「秋葉？ 秋葉というとあの富士見会の秋葉か？」

「ええ、実は・・・」

柘園は中村に先ほど見たDVDの内容を話して聞かせたのである。

そして、揉み上げをつまみながら話し終えた柘園に中村は言った。

「うゝむ・・・そりやなんともあこぎな！しかし、その映像ただと強制わいせつであるとの決定づけが出来んし・・・」

煮え切らない様子の中村に、柘園は眉間にしわを寄せると少し興奮気味に声を荒げた。

「課長！！ 秋葉は叩けばいくらでも埃のでる身体だ、強制わいせつが無理なら奴を何か別件で・・・」

柘園がそこまで言ったとき。

『 トウリルリン トウリルリン 』

向井の携帯が鳴りだしたのである。

向井が慌ててポケットから取り出して見ると、液晶パネルには小林刑事の名が表示されていた。

「あれ？ 小林刑事からだ、どうしたのかなこんな時間に・・・」  
そう言つて向井は枡園と中村にチラリと視線を送つたあと、通話ボタンを押した。

「はい！ えっ！また・・・!？」

電話に出た向井の顔色が変わり、その変化に気付いた枡園は椅子から立ち上がると眉間にしわを寄せた。

向井は慌てた様子で話し続ける。

「ああ、警部補は今俺と一緒にいる・・・!」

「・・・」

電話の聲がかすかに受話器から漏れたが、枡園には聞き取れない。

「・・・わかった！ 警部補と一緒にすぐ行きますと佐古田警部に伝えてくれたまえ。」

そう言つて向井は電話を切り、枡園が言った。

「どうした？」

「警部補すぐ行きましよう！」

「行く？ どこへ？」

「香坂かすみ飛び降りたあのビルです、また飛び降り自殺です！」

『なにいい！』

柘園と中村が同時に驚きの声を上げ、そしてその一瞬後、三人の階段を駆け降りる靴音が、夜の警視庁の建物内に響き渡っていた。

柘園と向井が現場に着くと、そこは裏通りとなるため人通りは少ないものの、どこで聞きつけたのか大勢の野次馬でこった返しており、部外者を近づけないためのロープが張られている。

二人が野次馬達の間を抜け、張られたロープをくぐり中に入ると、それを待ちかねていたように佐古田警部が駆けよって来たのである。

「まっさん、あんたまた携帯の充電切らしてるだろう！ いくらかけてもつながらないし・・・向井と一緒に助かったよ。」

「充電？ そんなこと知るか！ 私は上から持つよう言われて仕方なく持つてるだけだ！」

「あのなあ！ それじゃ持つてても意味が・・・」

佐古田があきれたような表情でそこまで言った時、向井が慌てて間に入った。

「まあまあ二人とも・・・警部補の携帯は俺が後で充電しておきますから。それより佐古田警部、飛び降り自殺というのはいったい！」

佐古田はヒョイと顎をしゃくり上げ歩道わきを指し示した。

「該者はあのブルーシートの下だ！ 二人とも顔を見たら驚くぞ！」

佐古田の言葉に柘園がもみあげをつまんだ。

「ん！ そんなにひどいのか？」

「そう言う意味じゃない・・・まあ見ればわかる。」

二人は案内されるままにブルーシートの前に立った。

そして、ゆっくりとめくられたブルーシートの下を見たとき、佐古田警部の予告通り柘園と向井は驚きで互いに顔を見合わせる事となったのである。

「じっこれは・・・」

そこに現れたのは、頭が割れ、辺り一面に脳みそを撒き散らし横たわる、秋葉剛のおぞましい姿であった。

一度は深夜に目覚めた来栖であったが、その脳裏に恐ろしい考えがよぎり、不安と恐怖におびえながらも疲れと空腹から再び眠りに落ちてしまっていた。

そして来栖が次に目を覚ました時には、時刻は八時半を回っていた。

起き上がりそつと右手を頭部にかざしてみると、ズキンと激しい痛みが走る……

来栖はズボンのポケットから携帯を取り出した。料金を払っていないため昨夜から通話こそ出来なくなっているものの電源を入れる事は出来る。

ボタンを押ししばらくすると、液晶画面の壁紙に花束を抱え微笑むかすみの姿が現れたのである。

それは、半年前のかすみの誕生日に来栖が写したものだっ

“ かすみ〜！ 俺はいつたいどうしたらいいんだ〜 ”

来栖は写真のかすみに語りかけながら、震える指先でメールフォルダーを開いた、すると液晶画面にはかすみから届いたメールが履歴として次から次へと現れてくる。

『今夜何食べたい？』 『大好き？』 『どこ行ってたの？』 『お仕事がんばってね???』

そのひとつひとつの会話を思い出しながら、来栖が最後のメールを開くと、そこには 『さようなら』 とたった一言が……

“ かすみ……黙っていなくなってますまなかった、俺はやっぱりお前がいないとだめなんだ！”

来栖の両目から大粒の涙がこぼれおちた。

“ そうだ、かすみ！・・・かすみに謝ろう！　そしてすべて話して力になってもらおう。”

来栖は立ち上がり薄暗い地下室から表へと出た。

そして右に左にフラフラとよろけながら1時間ほど歩き、1軒の雑貨屋の前に差し掛かったときだった。

店先に置かれてあったTVから流れてくるニュース映像に、来栖の足がぴたりと止まってしまったのである。

そこに映し出されていたのは紛れもない秋葉剛の顔写真であった！

来栖の口から思わず声が漏れた！

「こ・これは、昨夜の・・・？」

テレビでは興奮した口調で女子リポーターが喋っている。

“ ” 昨夜、高層ビルから男性が飛び降り死亡しました。死亡したとみられるのは、持っていた免許証から、秋葉 剛さん（45）と見られています。尚、このビルからは数日前、ほぼ同時に若い女性が飛び降りて亡くなっております。“ ”

そうやって女子リポーターがビルの屋上を指差したとき、ワイドショーの司会者の男が口を挟んだ。

「ほぼ同時刻に二人の男女が飛び降りたのですか？！　二人には、何か接点があるのでしょうか？」

その問いかけに、女リポーターが片手でイヤホンを押さえながら答える。

“ 数日前に飛び降りて亡くなった香坂かすみさんと、今回の秋葉剛さんとの関係は、今のところわかっていません……” “ ”

リポーターの言葉に来栖の表情が変わった。

“ 香坂かすみ……！ ま・まさか…… ”

かすみと言う言葉に反応した来栖がテレビ画面に近づくと、同時にかすみの写真が映し出された！

「あつ！ かすみ！ かすみが何で自殺…… ま・まさか、あの時のメールの“ さようなら ”の意味は……！！」

思わず声に出して呟いた来栖が、その場にガツクリと膝まづいたその時、頭の中に見たことのないはずの光景が浮かんできたのである。

それはまるで映画のスクリーンを見ているようであった！

来栖の頭の中には、最初に天使のようなかすみの笑顔が現れ、それが次第に恐怖に怯える表情へと変わっていくのだ。その目から涙がこぼれ、気が付くといつの間にか、かすみの後ろに二人の男が立ち不敵な笑みを浮かべているではないか！

やがて男たちが泣き叫ぶかすみに薬物を嗅がせると、かすみはその場に崩れ落ちた！

そしてその後、目を覆うような光景が、まるで来栖自身の目の前で

起こった出来事であるかのように鮮明に浮かびあがってきたのである。

「わあゝ や・やめろゝ かすみから離れろ！」

来栖が思わず叫び声を上げた時、頭の中の映像は消え去り、目の前には現実の世界が広がっていた。

“何だったんだ今は？ そ・そんな・・・いや・・・しかし待てよ・・・あの男たちどこかで・・・”

来栖の頭の中で何かが起きようとしていた！

“お・おかしい・・・俺はあの男たちを知っている！ なぜだ？ 何で知っているんだ？”

しかし、来栖が記憶の糸を手繰ろうと精神を集中したその時だった、またしても激しい頭痛が襲ってきたのである。

「うっぐっ・・・！！」

来栖は唸り声とともに苦悶の表情で頭を抱え、その場にうずくまった。

「うっぐっ・・・ぐっ・・・うっ・・・」

そのまま痛みは五分ほど続いただろうか、やがてのたうちまわっていた来栖はおとなしくなり、そして何事もなかったかの様に立ち上がると、ニヤリと口元を歪め不適な笑みを浮かべたのであった。

そのとき店先のテレビ画面では、あいかわらず司会者とりポーターの掛け合いが続いていた。

柊園と向井は会議室の椅子に座っていた。テーブルの上には死んだ秋葉とかすみ、そして現行方不明の来栖健二の写真が並べられている。

柊園がドンと大きな音を立て拳でテーブルをたたき、怒鳴るような口調で言った。

「秋葉が自殺だ！！ そんなことは絶対にありえん！ 奴は他人を死に追いやっても、自分が死ぬなんてことは、ありえんのだ。」

そう言つて柊園はこめかみをピクピクと引きつらせた。

向井がやりきれないと行つた様子でぼそりと呟いた。

「俺もそう思います。まったく本部はいつたい何を考えてるんでしょうかね？ かすみさんはともかく、秋葉が自殺だなんて・・・」

そこにドアが開き、婦警の青木雪乃（あおきゆきの 22歳）がお茶を乗せたトレイを手に入ってきたのだった。

「しつれいします。」

雪乃はふきげんそうな柊園の顔を見て、特徴である愛らしい大きな目をクリクリと動かすと、二人にお茶を差し出しながら言った。

「うふふ、警部補の声、隣の部屋まで聞こえてましたよ。」

「ん！……」

何も答えず、苦虫を噛み潰したような表情で出されたお茶をすする枳園に、雪乃がヒョイと肩をすくめる仕草をしたとき、その大きな目にテーブルの上の写真が飛び込んできたのである。

雪乃は一枚の写真を手に取り、軽く首をかしげながら言った。

「あら？ この男の人……」

青木雪乃婦警のその言葉に、枳園は口に含んでいたお茶を慌てて飲み込み椅子から立ち上がった。

「青木君！ きみはその男を知っているのかね。」

雪乃が手にした写真は加島礼子から借りてきたものであり、そこには来栖健二の数ヶ月前の姿が写し出されている。

雪乃はニツコリ笑うと、大きな目をクリクリと動かした。

「知ってます、浮浪者暴行事件の重要参考人で現在行方不明の来栖健二ですよね？」

あっけらかんと言う雪乃に、向井が不思議そうに目を細めて言った。

「ちよつとまって……なんで交通課の君が参考人の名前まで知ってるの？」

すると雪乃は、大きな目をクリクリと動かした。

「実は私、刑事志望なんです。それで未解決の事件をいろいろと私なりに調べてるんですよ。」

「刑事志望？ 君が・・・？」

向井が言っていると雪乃は入って来たドアの方を気にしながら言った。

「あつ！ でもお二人とも、このことは春日主任には内緒にしてくださいね。」

柊園の顔がかすかに緩んだ。

「ふっ・・・わかったわかった、春日君には黙っておくよ。しかし君も妙な言い方をするなあ、私はまた君が来栖健二と知り合いなのかと思ったよ。」

そう言つて揉み上げをつまみ苦笑いをする柊園に、雪乃が続けて言った。

「知り合いつてわけじゃないですけど、昨夜桜町商店街で見かけましたよ。」

揉み上げをつまむ柊園の指に力が入った。

「な・なんだと？ 桜町商店街？ で、この来栖はそこで何をしてたんだ？」

「喧嘩です、殴られて倒れてました！ 相手の男はこの人です。」

言いながら雪乃は次に秋葉の写真を指差したのである。

『えっ！！』

柊園と向井は同時に驚きの声をあげ、向井が慌てて立ち上がったため、座っていた椅子がカタンと大きな音とともに後ろに倒れた。

倒れた椅子を起こしながら向井が言った。

「青木君！ その時の様子を詳しく聞かせてくれないか。」

「はい、いいですよ。」

そう言つてニツコリ笑い、進められた椅子に腰をおろした雪乃が大きな目を動かしながら話しはじめると、向井は電子手帳を開き、その横で柊園は口を真一文字に結び目を閉じたのであった。

「昨夜九時頃だったかな？ 友達の珠美たまみと映画を観た帰り道お腹が減ったので、桜町商店街の中にあるファーストフードの店に行こうつて言う事になって、二人で歩行者天国の道を歩いてたんです、したら店の少し手前の交差点に人だかりが出来ていたんです。見ると、来栖が秋葉に殴られて倒れてました。」

その言葉に、向井が身を乗り出した。

「じゃあ君は、来栖が秋葉に殴られる瞬間を見たんだね？」

「いいえ、見てません。そばにいた野次馬の会話で殴られたことを知りました。」

「そうか、しかし来栖が重要参考人と知っていながら、なんで君はすぐ警部補に知らせなかつたんだ？」

「電話しましたよ。警部補の携帯に……でもつながらなかつたんです！」

「あつ！そうか警部補の携帯は……なら中村課長に……」

「ええ、でもその時はまだその人が来栖だとは思ってませんでし、それに誰かが警察に電話してる声が聞こえたので、私も警官だし到着を待つてから一緒に行動しようと思つてたんです。」

「そうか……君はその時遠巻きに見てたんだね？」

「はい。」

「で、その男が来栖と気付いたのは？」

向井の質問に、雪乃はにっこり笑い大きな目をくりくりと動かした。

「ついさつきです！今朝ロビーに貼りだされた手配写真を見て……だからお二人にお知らせしようところして私がお茶汲みを買つて出たんですよ。」

「そうか……そりやすまない……」

「いいえ、どういたしまして。あつ！でも向井さん、あの手配写真わかりにくいですよ。なにしろ写真に比べて現在の来栖は目は落ちくぼんでるうえひげ面で、第一印象は随分ちがって見えまし

たもの。」

「なるほど、ひげ面か……」

向井がそう言って自分の顎のあたりに手を当て唸り声を上げると、雪乃は続けて言った。

「というわけで私と珠美は警官の到着を待ってたんです、でも警察が来る前になんとも不思議と言うか不気味というか……倒れて動かなかった来栖の顔が見る見るうちに鬼のような顔になって、それから秋葉を歩道に追い詰めて……!」

「鬼のような顔？ 来栖の形相が変わったと言うのかい？」

「はい、来栖はまるで何かが乗り移ったか、でなければ何者かに操られているかのようでした。」

こうして雪乃は、柘園と向井にあの夜見た光景の一部始終を身振り手振りを交えながら話して聞かせるのであった。

夕飯の支度をしながら、増野圭子はチラリと柱時計を見た。

“もう五時……雅斗まひでまだ公園にいるのかしら?!”

圭子は造りかけていたシチューの火を止め、自宅から五分程のところにある住宅街の公園へと足を向けた。

そこは、あまり広くはなく、鉄棒にすべり台、そしてすべり台の下にこじんまりとした砂場があるだけだ。

「ママァッ。」

鉄棒をしていた4〜5人の子供の中から、小学2年生の雅斗が圭子の元へ走って来る。

圭子は雅斗を抱きながら、頭を軽く小突いた。

「いつまで遊んでいるのよ・・・もう5時過ぎてるわよ。」

「だって・・・すべり台が出来ないんだもの。」

そう言つて口を尖らせながら、雅斗はすべり台を指差した。

圭子がすべり台を見ると、そこには中年の男性らしき人物が座り、こちらを見ている。

もう周りは薄暗くなっていてその表情までは分からないが、何か不自然さを感じた圭子は雅斗の前にしゃがみ、小声で問いかけた。

「いつからいるの?」

「僕が来た時からあの恰好でいるよ。」

「変質者かしら・・・」

そして、恐る恐るすべり台に近づいて行った圭子の口から、悲鳴とも奇声ともつかない叫び声が上がったのである。

「ぎゃ〜ッ!!! X・・・」

すべり台に座っている、中年の男の身体は正面を向いているのに、顔は真反対の階段の方を向き、その首にはどす黒く乾いた血のあとが、まるでネックレスをしているかのようにくつきりと残されているではないか。

そして、驚いた圭子が腰を抜かしその場にしりもちをつくと、その弾みで男の首が身体を離れ、階段を伝いながら圭子の前に転がり落ちて来たのである！

「ギョエッ！！」

再びあがった圭子の悲鳴で、住宅街の公園は、たちまち人だかりで埋め尽くされたのであった。

来栖健二は、なけなしの小銭をかき集め、いつもの屋台でコップ酒をあおっていた。

かすみの死を知り、それが自殺であるという事実が、よりいっそう悲しみを深くして行く。

“ かすみ、俺のせいなのか？ 俺が、お前を？”

来栖は、屋台のカウンターに額を押し付けると、そのまま眠るように目を閉じた。

そして数分後・・・

「うわあ〜っ!」

夢を見ていた来栖が突然目を覚まし、狂ったように叫びながら立ち上ったのである。

すると、隣で飲んでいた五十がらみの男がその声に驚き、今まさに口に運びかけていた酒がこぼれ男のズボンを濡らしたのである。

怒った男は、椅子を蹴散らすようにして立ち上がり、いきなり来栖の胸倉を掴んで来た。

「てめえ、なんだいきなり? 酒がかかっちゃまっただろっが!」

酔いが回っているのか? それとも怒りのせいなのか? 男は真っ赤な顔で怒鳴り散らす!

しかし、来栖は男の姿が見えていないかのように、ボーと宙を見つめたまま答えようともしない。

「このやるうなめやがって!」

男が胸倉を掴んだ腕を力任せに引き寄せると、バランスを崩した来栖は前のめりになり、その瞬間、男の右ひざが来栖のみぞおちに食い込んでいた。

“ぐえ!”

踏み潰されたかえるのようなうめき声を上げ、来栖はつつぶせに倒れたままピクリとも動かない。

「けっ！ さつさと帰ってママのおっぱいでも飲んでな！」

そついい残すと、倒れたままの来栖に背を向け、男は何事もなかったかのように、元の屋台へと戻って行った。

「まったく頭に来る野郎だぜ。」

言いながら、腰をおろした男に、屋台の親父が心配そうに声をかけた。

「お客さん・・・あの人の、あのままほつといて大丈夫ですか？」

「大丈夫だ、死にはせん。」

「いや・・・しかし、まったく動きませんよ！ ちょっと見てきましようか？」

そう言って来栖のもとに行こうとするおやじを、男が大声で引きとめた。

「ほつとけ！！ そんなことよりおやじ、酒だ！ 酒をくれ。」

「は・・・はい。」

男を怒らせては自分の身も危ない、そう思い、差し出されたグラスに酒を注いでいた屋台のおやじが、一瞬ピクンと身を躍らせたかと思つと、ピクピクと顔を引きつらせながら、ぴたりとその動きを止めたのである。

「どうしたんだ？」

男は不思議そうに尋ねたが、おやじは一升瓶を手にしたまま一点を見つめ、凍りついたように立ち尽くしている。

「おい！ おやじ！」

「あわわわわわ・・・！」

おやじが言葉にならぬ声を上げ、男の右後ろを指差した。

「チツ！ なんだってんだまったく。」

イラついた男が、おやじの指差すほうに振り向いたときだった。

“ガシャン”

何者かの手により振り下ろされた空の一升瓶が、男の頭部で激しい音とともに砕け散ったのである！

飛び散った真つ赤な血が暖簾を染め、男は声を上げるまもなく椅子から崩れ落ちた。

「あわわわ！ 化け物だっ・・・だ・誰か助けてくれっっ！」

腰を抜かし、その場にへなへたと座り込んだ屋台のおやじの叫び声を聞きつけ、大勢の通行人が集まってきた。

「何があったんだ？」 「事故か？」 「酔っぱらいが暴れてるらしいぞ。」 「客同士の喧嘩だろう？」

通行人たちは好き勝手な事を口にしながら、その数をどんどん増やしていく。

群衆の中央には、砕け散り口の部分だけとなった一升瓶を右手にきつく握り締めたまま、鬼のような形相で仁王立ちに立つ男の姿があったのである。

「きゃ〜っ!」

群衆の前の方にいた女が、血だらけで倒れている男を見て狂ったような悲鳴を上げると、その声に瓶の欠片を握った男がゆっくりと振り返った。

大量の帰り血を浴びた顔を、不気味なほどに歪めて男は笑った!

「ひっひっひっひ・・・」

「だめだ! こ・こいつ狂ってるぞ。」

先頭の男の呼び掛けで、一同がざわめきとともに後に下がった、その時だった。

怯える群衆をぐるりと見回した男が、持っていた瓶の欠片をバリバリと握りつぶしたかとおもつと、指先から自らの血を滴らせながら言ったのである。

「わたしは来栖です!!」

来栖がそう言って獰猛な笑みを唇に浮かべたとき、誰かの通報で駆け付けたパトロールカーが屋台の前で赤い点滅を繰り返していた。

• • • ^ U J U

## 誘導自己暗示（憎悪のマリオネット）

### 第4章・誘導自己暗示（憎悪のマリオネット）

大都会の閑静な住宅街の公園で起こった猟奇殺人事件は、日本中を震撼させ、この事件を仕切る事に成った佐古田警部は、もじやもじやの髪の毛を掻きむしった。

その後の警察の調べで、身元は免許証から暴力団富士見会幹部 岸田杜雄（きしだもりお 48）と判明し、岸田は後ろから鋭利な刃物で心臓を一突きされており、ほぼ即死状態であり、死後首を切断したとも思われる。そしてその切断された顔の口の中からは、“天罰”と書かれていた紙切れが発見されており、その文字は手書きではなく、何かの雑誌から切り抜いたものとみられ、死亡推定時刻は、死体が発見された日の午前六時から十時という事と、何所か別の場所で殺害され、あの公園のすべり台の上に午後二時から四時の間に、発見された格好で置かれたという事が、今までの調べで分かったのである。

佐古田は頭を抱えた・・・。

なぜ、犯人は首を切断したんだ。

なぜ、犯人は危険を冒してまで、死体を白昼公園に運んだんだ。

なぜ、犯人は死体をすべり台の上にあの恰好で置いたんだ。

なぜ・・・？ なぜ・・・？ なぜ・・・だ！？。

夜十時、来栖の身柄確保で一段落ついた向井は、自宅である六畳一

間のアパートに戻ると、背広を脱ぎ棄て畳の上にごろりと横になった。

アパートに戻ったのは何日振りだろうか？ そんなことを考えながらTVをつけると、トーク番組の中で見覚えのある人物が何やら司会者に話している。年恰好は50半ば・・・髪は七三に分け白衣のようなものを羽織っている。

“ん！ 誰だったかな？”

向井はなぜか気になり始め、疲れから襲って来ていたはずの睡魔さえも忘れてしまったかのように、気が付くと画面にかじりついた。

やがて男が正面を向いた。

“ああ、この人は確か誘導自己暗示療法と言う独自の治療法で、たくさんたきがわしゅうじの精神病患者を治療していることで有名になっている、榊原診療所の滝川秀二医師だ。”

どうやら番組では、彼の誘導自己暗示療法について特集をしているようだ。

司会者が滝川にマイクを向けた。

「先生！ それは要するに催眠術のようなものと考えればいいのですね？」

その問いに、滝川が長々と説明を始め、向井がぼつりつつぶやいた。

「催眠術か・・・」

“催眠術”その言葉が脳裏に何かを訴えかけてくるように感じたものの、人物が何者であるか解り安心した途端、向井の臉は重くなりそのまま朝を迎えたのであった。

そして翌朝、警視庁の1階ロビーに置かれた自動販売機の前の長椅子に座り、柘園が紙コップのホットコーヒをクルクルとかき回しているところに、封筒の束を抱えぶつぶつと文句を言いながら春日婦警主任（41歳）が通りかかった。

「まったくも、これじゃ1日中シユレッタの前から離れられやしないじゃないの!」

丸顔がさらに大きく見えるほどふくれっ面をしている春日婦警を、柘園が呼びとめた。

「春日くんおはよう! 何を朝からぶつぶつとご機嫌斜めなんだね?」

「あつ! おはようございます。柘園さん、一度柘園さんの方から注意していただけませんか?」

「注意? 一体何のことだね?」

首をかしげる柘園に、春日は持っていた封筒の束を差し出して見せた。

「これですよ! ダイレクトメールです。」

そう言っつて春日が差し出した封筒には、どれもアダルトビデオのパ  
ンフレットが入っている。

「子供がいるのにこんなものを送り付けられて困ってる、との市民  
の方々から苦情が殺到していて、差出人に連絡しようにもビデオ業  
者はすでに会社の名が変わっていて経営者が違つと言っし、以前の  
会社のことを訪ねても名簿業者に委託していて、そちらが勝手にや  
つてることなので自分のところでは何もわからないと言っんですよ。」

柊園はあきれ顔でコーヒーをすすった。

「それじゃ私だっつてどこに文句を言えばいいのかわからんじゃない  
か。」

言いながらパンフレットを手に取り、ちらりと視線を走らせた柊園  
のこめかみがピクリと反応した！

その目は大きく見開かれ、パンフレットの一点を凝視している。

“こ・これは・・・ま・まさか・・・！”

柊園は慌てて立ち上がり、春日婦警から全ての封筒をひったくるよ  
うに奪うと言った。

「春日君、これをしばらく私にあずからせてくれ、後でこちらの方  
でシュレッタをかけておくから。」

「はい・・・それは別にいいですけど・・・。」

春日はそこでいったん言葉を切り、柘園の顔を見てニヤリと笑みを浮かべた。

「あゝ・・・まさか警部補、そのビデオ買うつもりじゃないでしょうね？」

「何を・・・馬鹿を言うな!!」

柘園がそう言って眉間にしわを寄せ揉み上げをつまむと、春日はもう一度意味ありげな笑みを浮かべその場を後にしたのであった。

そして数分後、一課の自分のデスクに戻り、しきりともみ上げを触りながら考え込む柘園警部補のもとに、向井刑事が電子手帳を持ち近づいてきた。

柘園がふと顔を上げ言った。

「おお、向井！ ずいぶん遅かったじゃないか。」

「すみません！ ちょっと資料室のパソコンで調べ物をしていたもので・・・」

向井はそこで言葉を切り、真剣な表情で柘園の目を見つめた。

「警部補！ もしかしたら、自殺した二人は何かの暗示にかかっていたのではないのでしょうか?!」

向井の言葉に、柘園の目が鋭く変わった！

「何かの暗示・・・どういうことだ？」

「はい！ 実は昨夜TVでやっていた誘導自己暗示療法と言うのがやけに気にかかりまして、その誘導自己暗示療法について詳しく調べてきたんです。」

「誘導自己暗示療法？　ますますわからん！」

眉間にしわを寄せ揉み上げをつまむ柵園の前で、向井は電子手帳を開いた。

「警部補！　誘導自己暗示療法は“クーエの自己暗示法”という治療法がベースになってるんです！　クーエというのは人の名で、フランス北東部に住んでいた、エミール・クーエという薬剤師のことなんですが、そのクーエが、当時薬が手に入りにくくなっていったことからしかたなく、期限を過ぎ色も褪せた薬を売ったんだそうです。しかし正直者のクーエは、成分的にも効力もなく効く訳がないと考え、そんなもので相手からお金を取ったことに対し、頭を抱え思い悩んでいたのです。ところが、後日薬を買った男が、“あの薬をのんだら病気が治った”とお礼を述べてきたことから、クーエは薬の効果には薬という物質の他に“必ず治るという思い”が働くのではないかと思いつき、そして薬剤師をやめ“クーエの自己暗示療法”という治療法を始め、その驚くべき効果から世界的に有名になりました！！　そのクーエの自己暗示療法の中には、“誘導自己暗示”というのがある、誘導自己暗示というのは、他人が本人の持つ“潜在意識”に外部からアクセスすることであり、暗示は潜在意識へインプットするための、プログラムであるわけです！　この鍵である暗示を、適切に潜在意識へインプットできれば、潜在意識はそのプログラムにしたがって、全力をあげて動き出すというものなのです・・・つまり、誘導自己暗示を使えば、他人をコ

ントロールすることも不可能ではないのです!!」

向井が興奮気味に説明を終え電子手帳をパチンと閉じると同時に、  
柘園警部補は眉間にしわを寄せ、首をひねった。

「お前の言わんとする事がよく分からん!! 潜在意識に外部から  
アクセス・・・そりゃ、どういうことだ?」

向井は柘園の座る正面の椅子に腰を下ろした。

「分かりやすく言うと催眠術のようなものです!」

「ん? 催眠術?」

「はい!! エミール・クーエは実際にたくさんの人を救ってるん  
ですよ! 誘導自己暗示で、他人を自殺に追い込むことだって!」

「うゝむ・・・なるほど催眠術か!? 確かにあの二人の死を殺人  
とするならば、何か常識とはかけ離れた方法で行われたと考えてみ  
るのもいいかもしれんな!」

柘園はそう言つて宙を睨みつけながら揉み上げをつまんだ。

「はい! 秋葉のようなやつが自ら死ぬはずは無いのですから、そ  
うなると誘導自己暗示で何者かにコントロールされた可能性が十分  
考えられます。」

「・・・・・・・・」

柘園は窓の方を見つめ何も答えない。

「警部補、ほんの少しの可能性でもある以上、一度独自の誘導自己暗示療法を行っている榊原診療所の滝川秀二医師に会ってみませんか？」

向井の言葉に窓の方を向いていた柊園がくるりと振り返った。

「うむ、そうだな・・・ だがな向井！ その前にこいつをちよいと見てくれ！」

そう言っただけ柊園は先ほど春日婦警から預かった封筒から中身を取り出しパンフレットを広げて見せた。

そこには“素人 乱れ咲きシリーズ” とタイトルのつけられた、俗にAVと呼ばれる数枚のDVDの内容説明が書かれ、その見所が複数の写真で紹介されている。

「警部補、これは？」

訳がわからず首をかしげる向井に、柊園がパンフレットの写真に映っている一人の人物を指差して見せたのである。

柊園の指先を視線で追っていた向井が驚きの声を上げた！

「あっ！ こ・これは・・・」

「そうだ！ 小さくて見えにくいけど、ここに写っているのは間違いなく“加島礼子”だ！」

向井は信じられない様子で何度も顔を近づけ確認したが、そこには

柊園の指摘通り、加島礼子であるとしか思えない女性の姿がある。

柊園はさらに続けた。

「そしてその横に、横顔だけがかすかに見えている男がいるだろうか？ お前には、そいつが誰に見える？」

「こ・これは・・・秋葉です！ 警部補！これは間違いなく秋葉ですよ！」

興奮気味に振り返った向井に柊園は言った。

「う・む・・・やはりそうか。これで加島礼子が最初にDVDを出せなかった理由がわかった、かすみだけでなく自身の出演したDVDが存在するのなら、ためらうのも無理はない。」

「ためらう？ しかし警部補、結局は彼女はかすみの映像を提供したわけですし、そうなれば自身の映像も遅かれ早かれ出る事になることくらい、わかっていたと思いますけど。」

向井のその言葉に、柊園は椅子から立ち上がると窓から外を眺めながら言った。

「向井！ 加島礼子は自身のDVDの存在を知られることためらったんじゃないんだ、それどころか、かすみのためにも礼子は一時でも早くこの事を知らせたかったんだ！ しかし出来なかったんだよ・・・秋葉が死ぬまではな。」

窓から差し込む光りを背に、もみ上げを触る柊園の姿がシルエツトとなり、輝きを増した向井の目に映り込んでいた。

加島礼子はカーテンのひかれた薄暗い部屋で、一人DVDプレイヤーの再生ボタンを押した。

テレビ画面には、ベッドの上で一糸纏わぬ姿で身じろぎもせず、天井を見つめる自分自身の姿が映し出されている・・・

やがて二人の男が現れ、礼子の上に覆いかぶさるようになるのしかかった。

礼子の意思とは関係なく、男達はなすがままにいたぶり続ける・・・。

テレビの前の礼子は、あふれ出る涙を拭おつともせず、ワナワナと震えるばかりであった！

さかのぼること数年前・・・。

礼子は、かすみがうらやましかった。

礼子には、田舎の病院に治る見込みのない病気で入院しているたった一人の母がいる。そのため収入のほとんどが母の入院費で消えてしまっているのだ。

礼子は思った。

“ かすみのおしゃれがしたい！ かすみように素敵な彼氏が

ほしい。 かすみように・・・かすみように・・・。”

礼子の母は女手一つで礼子を大学まで行かせてくれた。しかし礼子が大学を卒業し、就職が決った年に脳梗塞で倒れてしまい、意識の戻らぬまま延命措置を施す事となったのである！

だが、それには莫大な費用がかかる。

会社でも前借りが重なり、礼子が一人頭を抱えていたときだった、事情を知ったかすみ同居を持ちかけてきのである。

同居する事で家賃はもちろん、光熱費や食費の負担が軽減されるとの考えからの申し出であった。

礼子はかすみの優しさが有り難かった。

礼子はかすみの手を取り、大粒の涙を流しコクリと頷いた。

こうして二人の共同生活は始まったのである。

だがしかし、時はすでに遅く、礼子の借金は大きく膨らんでいた。

そんな時、街角の小さな貼り紙が目にとまったのである。

“ 消費者金融 富士見ローン ”

富士見ローンは、暴力団富士見会が経営する悪徳金融で、若い女性相手に高額な利息で金を貸しあたえ、支払えなければビデオ出演させ、時には売春さえ強要される。

礼子はそのチラシに導かれるようにドアを開いてしまったのだ、それはまさに地獄への入り口であった！

礼子の借金は日を追うごとに膨れ上がり、身も心もボロボロに疲れ果てていた。

それでもかすみの前では精一杯明るく振舞っていた……でも一人になると涙があふれてくる “もうどうでもいい……このまま死んでしまおうか……” 思い悩み、何日も部屋の中で膝を抱えたまま、満足に食事さえろくにとらない日々が続いていた、そんなある日のこと、礼子の携帯に叔母からの連絡が入ったのである。

叔母は礼子の母の妹であり、付き添いを自らかつてでてくれている。

「礼ちゃん！ お母さんがたつた今……」

電話の声は涙でつまつた。

あわてて礼子が駆け付けつけたときには、母の顔には白い布がかけられていた。

「お母さん！！ 側にいられなくてごめんね。」

礼子は溢れ出る涙と脱力感で、その場に崩れおちた。

叔母と礼子は二人抱き合い、何もかも忘れ大声で泣いた……しかし、礼子は気づいていた、心の奥でホッと胸を撫で下ろす自分がいたことを！

そして葬儀も終わり、礼子は墓前に黄色い花を供えた。

それは母の好きだった花・・・名前さえ知らない花・・・。

子供のころ礼子は、母に手を引かれ花畑に行くのが好きだった。そんな時、母はこの花を指差しいつも言っていた。

「かあさんはねえ、この小さな黄色い花が大好きなのよ。」

「ふくん！このお花、なんて名前？」

礼子がたずねると、母は花びらをそつとつまみ、ニッコリと微笑んだ。

「名前なんか知らない・・・名前なんかなくてもきれいに咲いてるじゃない。元気に、誇らしげに・・・かあさんは礼子にもこの花のように生きてもらいたいの！」

そう言つて、頭をなでてくれた母の手のぬくもりを思い出し、礼子は唇をキュツとかみ締めた。

参列者に挨拶を済ませ、東京への帰り支度をしていたとき、礼子は叔母に呼び止められた。

叔母は大きな封筒を大切そうに握り締めている。

「これはお母さんの生命保険の証書と預金通帳です。」

予期していなかった出来事に、礼子が驚きながらも中を確認すると、保険は死亡時のみ支払われる少額ものだったが、それでも礼子の借

金はすべて補うことができたのである。

・・・そして数日後、借金を返済した礼子は、商事会社を辞めて秋葉を呼び出した！

「俺に、なんの用だ？」

仏頂面で、不信げに見つめる秋葉に、礼子は言った。

「実は、私・・・あなたの事が好きになっただんです！」

こうして、秋葉と礼子が付き合い初めて一ヶ月すぎたころ、礼子は夕食の支度をするかすみに言った。

「実は私ね・・・彼氏がいるの・・・今夜は帰らないけど心配しないで！」

そう告げると、かすみはまるで自分の事のように喜び送り出してくれた。

翌日、秋葉のマンションで朝を迎えた礼子が目をさますと、秋葉はすでに起き出し札束を数えていた。

「早いのね！」

そう言って礼子はベッドから立ち上がり、カーテンを開けると、一心不乱に札束を数える秋葉の方に近づいて行った。

「どうしたのそのお金」

礼子がそう訊ねると、秋葉は振り返り、にやりと不敵な笑みを浮かべた。

「バカな女はお前だけじゃないのさ・・・これは、そのバカ達が主演したDVDの売上金だ！」

言いながら、秋葉は数え終えた札束をカバンに詰めている。

その姿を黙って見つめる礼子の目は、憎悪と殺意に満ちていた！

“私がバカな女ですって！？ 私はあなたをぜったいに許さない・・・！！！”

それは、自分の身体を犠牲にした、礼子の復讐劇の始まりであった。

枅園は、向井を“公園首切り事件”を担当する佐古田班の援護に回し、一人喫茶店の一角で精神科医滝川秀治と会っていた。

滝川は主にカウンセリングと、彼独自の治療法“誘導自己暗示療法”を行っている。

ホットコーヒーを二つ注文したあと、誘導自己暗示について詳しく説明を求める枅園に、滝川は出されたコーヒを一口啜ると、快く話し始めた。

「自己暗示というのはですねえ、たとえば誰かにチーズを食べさせたとします。その後“そのチーズは腐っていた。”と相手に告げるのです。するとその人は吐き気や腹痛を訴える・・・でもチーズは腐ってなどいないのです！痛んだ食べ物を口にした不安が、その人の持つ潜在意識へ働きかけることにより、腹痛を引き起こすのです。その潜在意識へ外部から刺激を与える・・・それが誘導自己暗示なのですよ。」

黙って頷きもみあげをつまむ柘園に、滝川は話しつつづける！

「私の治療に薬品は使いません！私が患者に与える薬はこれです。」  
「  
そう言つて、滝川はCDウォークマンを差し出した！

柘園は受け取るとヘッドフォンを耳にしばらく聞いていたが、やがてヘッドフォンを取り不思議そうに首をかしげた。

「これが治療になるのですか？私にはただゆったりとした音楽しか聞こえませんが。」

滝川はにっこり笑い、大きく頷くと言った。

「そのとおりです。聞こえていたのはただの音楽です！でもそこには、音楽のほかに人間の耳で聞き取れない音域で、私の声が入ってるのですよ。たとえば犬の怖い人には“犬はかわいい。犬は怖くない”というぐあいに音楽とともに繰り返してるのです。

耳で聞き取れない音域でも、それが音として認識できないだけで、人間の鼓膜には届いています。それが繰り返すことで本人の意思に関係なく、少しずつ潜在意識に働きかけるのです。」

話し終えた滝川は、柊園の顔をしげしげと見つめた。

「うむ……！なるほど……」

分かったのか分らないのか、柊園がうなり声を上げたとき、その脳裏に稲妻のような閃光が走った。

“ま……までよ！！ さっきの音楽は確かどこかで……？”

柊園は眉間にしわを寄せ揉み上げをつまんだ。

“そうだ！ 礼子から手渡されたDVDだ！ あれは三人が絡み合うその後ろでBGMとして流れていた曲だ……やはり秋葉は……！”

考え深く遠くを見つめていた柊園だったが、やがて気を取り直したように再び滝川に問いかけた。

「先生！ その誘導自己暗示ですが…… それは、たとえば治療ではなく、別の事にも利用できますか？」

「えっ……別の事といいますと？ たとえば誘導自己暗示を使ったその人物に犯罪を犯させるとか……ですか？」

「ええまあ、そういった類です！」

「可能だと思います！」

滝川が考えることなく答えると、柊園はもみ上げを触っていた手を

コーヒーカップへと移しながらさらに質問をつづけた。

「そうですか。ではもうひとつ、あなたは、あなたのほかに誘導自己暗示を行える人物を、ご存知ではありませんか？」

滝川は柊園から一瞬目をそらしたものの、すぐに気を取り直したようににはつきりとした口調で言った。

「います！！ 私が大学の講師時代、誘導自己暗示を研究していたころのことですが、一人の女子生徒が非常に興味を持ち、私の助手を名乗り出たことがあります！ 彼女なら誘導自己暗示のBGMとなる音楽の収録されたCDも持っていますし……」

滝川を見つめる柊園の目の奥がきらりと輝いた。

「女子生徒？ うむ……先生！ その女子生徒の名は……？」

滝川は柊園の目を見つめながらコーヒーを一口すすり、そして言った。

「刑事さん、遠回しな言い方はやめましょう。あなたは私の誘導自己暗示を使って、私の教え子であるその女子生徒が、やくざ者を死に追いやったとお考えなんでしょう？」

「んー」

驚きの表情で見つめる柊園に、滝川は続けて言った。

「実はつい先日彼女から連絡がありました！ 近いうちに刑事さんが私を訪ねてくるはずだね。そして彼女は私に全てを打ち明け

てくれましたよ。」

そう言つて枳園の顔しげしげと見つめたあと、滝川は突然後ろを振り返つた。

「礼子君！　こちらに来たまえ。」

その声をかけると、少し離れたテーブルの向こうに人影が動き、陰になつていた観葉植物の後ろから加島礼子が現れたのである。

そして礼子はゆっくりと近づくと滝川の隣に腰を下ろし言った。

「刑事さん、今まで黙つていてすみませんでした……実は私……」

「わかつてる……君が秋葉に滝川先生の誘導自己暗示を使ったんだね!？」

枳園がそう言つて礼子に穏やかなまなざしを向けると、礼子は隣に座る滝川に深々と頭をさげた。

「……ごめんなさい……私先生の大切な研究を……。」

すると滝川は、その場に崩れ落ちそうになる礼子の肩にそつと手を置くと、やさしい口調で言った。

「いいんだよ、君は私の助手だ！　誘導自己暗示が完成したのは君の力があつてこそだ、あれは私だけのものじゃない……それより、今ここでもう一度刑事さんに全てをお話するんだ!」

礼子はだまつてうなずき、ハンカチで涙を拭くと、自分と秋葉との関係を洗いざらい話して聞かせたのであった。

そしてしばらくの沈黙の後、柊園が口を開いた。

「礼子さん、それでは秋葉の死はあなたは復讐だったのですね？」

「はい！ 私は最初に刑事さんに会った時、あのDVDを渡そうかどうか悩みました、渡せば警察は秋葉に目をつけ、私の計画が実行しにくくなる、そう思ったからです。でも、かすみの事を思うと・・・」

「やはりそうでしたか・・・しかしどうやって秋葉に誘導自己暗示を？」

「これです！」

そう言つて礼子はシヨルダーバックから一枚のCDを取り出した。

「ここに先生と一緒に作り上げた誘導自己暗示に必要なアルファ波を混在させた音楽を収録し、その音楽に重ねるように“死にたくなる・・・死は幸せを呼ぶ！ 月に導かれ、フェンスを超えて夜空に飛び出せ・・・！！” というような、秋葉を死に導くための言葉が、私の声で入っています。これを秋葉が製作するDVDのBGMに流させるように仕組んだんです。私は、あの男が製作現場に必ず同席していることを知ってましたから・・・そうすることで、何度も繰り返しあいつに聞かせることができたんです！」

「なるほど・・・」

柊園は眉間にしわを寄せ揉み上げをつまんだ。

そして、しばらく考え込むように下を向いた柊園だったが、やがて思い出したように顔を上げ言った。

「ちょっとまってください、確か私が先生から伺った話ですと、脳内にため込まれた行動のための潜在意識は、それを発動させるためのキーワードがないといけないはずですが？」

その言葉に、礼子は唇をかみしめながら大きくうなずいた。

「そのとおりです……このCDの音楽の最後には来栖健二の声で“お前死ねえ！”と収録してあります。その言葉が秋葉の死へのGOサインとなっているのです。」

「来栖の声？ いやしかし、それだと来栖が“お前死ねえ！”と秋葉に対して言わない限り……」

そこまで言った時、柊園のこめかみがピクリと反応した。

「あつ！ そうか、あの晩商店街で二人は偶然出くわしてるんだ！」

「その通りです、あれは本当に偶然でした。あの日はチャンスを狙って秋葉の後をつけていたのですが、まさかあんなにうまくいくとは……。」

礼子の両頬は涙で濡れていた。

柊園は口を真一文字に結び目を閉じた。

そして三人の間にしばし無言の時間が流れたのである。

やがて柘園が目を開き、滝川に向かって言った。

「滝川先生・・・仮に、彼女の誘導自己暗示で、秋葉が飛び降りて死んだとします・・・。この場合彼女が殺したのだと断言できますか？」

滝川はワナワナと震える礼子の肩を、そっと抱きながら言った。

「いいえ、残念ながら私の誘導自己暗示は万能ではないのです。人によって効果の現れ方が違いますし、中にはまったく効果が得られない場合さえあります・・・したがって、誘導自己暗示と投身自殺とを関連付けるのは、まったくもって不可能です！」

柘園は大きくうなずいた。

「そうですね。それならば秋葉の死は、本部の発表どおり自殺で間違いない！ 礼子さん、あなたは大きな思い違いをしていただけなのです！」

「えっ！ でもそれじゃ・・・」

「それでいいのです！ 誘導自己暗示の権威である滝川先生が立証できないと言ってるんだ、そうなるこれ以上警察に何が出来ると言っただね？」

そう言って揉み上げをつまみ、礼子を見つめる柘園の目からは鋭さが消え、まるで全てを包み込むような優しい光が満ち溢れていた。

礼子は喫茶店の片隅で、滝川医師の胸にその顔をうずめ、周りの目さえ気にすることなく大声で泣いた。

滝川は泣きじゃくる礼子を抱きしめたまま、柗園に深々と頭を下げるのであった。

つづく・・・

## 五色系の伝説 (来栖の中の女)

### 第5章・五色系の伝説

喫茶店の片隅で柊園に全てを打ち明けた加島礼子は、恩師滝川秀二医師の胸に顔をうずめ泣きじゃくっていた。

滝川は無言のまま礼子の頭を優しく撫ぜている・・・

そして数分後、礼子は冷静さを取り戻し、それを待ちかねたかのように柊園が再び口を開いたのである。

「礼子さん、今の涙とともに全てを忘れなさい。」

その言葉に、礼子が唇をかみしめながらコクリとうなずくと、柊園もニコリと笑い大きくうなずき、そして続けた。

「よし！ その調子だ、君はたくさん悲しみを乗り越えてきたんだ、それだけに涙より笑顔の方が似合う。」

「ありがとうございます、刑事さんの心遣いは一生忘れません。」

「いや、私は当たり前前の判断を下したまでだ。それより礼子さん！ 私にはもう一つわからないことがあるのですが、あなたはかすみさんが来栖に殺されたと言いましたね？ それはなぜですか？」

礼子はハンカチで涙をぬぐい、柊園の目を見つめて言った。

「かすみは自殺だと思います・・・でも、かすみは・・・かすみは

殺されたも同然なんです！」

礼子は尚も続けた。

「私は、かすみから来栖が二重人格だと聞かされました。でも信じることができなかつたので、かすみが来栖に呼び出されて行つた後をつけました。そして、二人が会つている所を隠れて見ていたのです・・・すると、しばらくたつて、二人はもめ始めました。そつと耳を澄まして聞いてると、来栖が一方的にかすみにも別れ話を切り出しているようでした。かすみは納得がかなかつたのでしよう、理由を聞かせてほしいとしつこく詰め寄っているように見えました。その直後です、私は自分の目を疑いました・・・いらいらしていた来栖の顔が、まるで鬼のように変わり “お前死ねえ！” と叫んだかと思うと、いきなりかすみを殴りつけたのです。」

滝川医師が右手を口元に当てながら聞いた。

「その時叫んだ声を君は・・・」

「そうです！ 二重人格の証拠がほしかったので録音していたんです、それを誘導自己暗示の・・・」

そう言った礼子の目には再びうつすらと涙が光りはじめ、それを見た柊園は慌てて話をもとへと引きもどしたのだった。

「それはもういい、よくわかつた。それよりかすみさんのことだが、来栖に殴られたことで自殺を・・・?!」

「いいえ、問題はその後です・・・。気を失つたかすみの顔を覗き込んだ鬼のような来栖は、携帯を手にしどこかに電話をしました

！するとやがて、一人の男が車で駆けつけ、来栖にお金を払ったのです・・・金額はよくわかりませんでした。男はかすみを車に押し込むとあつという間に走り去りました。私は怖くて急いでその場を逃げ出したんです。そして、その次の日です、私は秋葉からDVDを見せられました・・・そこには秋葉達から辱めをうける、かすみの姿が映っていたんです！ こともあるうちに秋葉は私だけでなく親友のかすみにまで・・・」

それを聞いた滝川医師が、冷めてしまったコーヒーを一口飲むと、やり切れないと云った表情で呟いた。

「・・・なるほど、確かに元恋人だろうと、若い女性がそんな形で裏切られると、死を選ぶのも無理はないな、かわいそうに、さぞ辛かっただろうに・・・。」

礼子は思いつめたような表情で柊園を見た。

「かすみは、それ以来自分の殻に閉じこもるようになったんです。飛び降りた日の朝、かすみはにっこり私に微笑みかけました・・・私はそれを自分勝手に解釈してしまったのです。かすみはもう大丈夫だと・・・でも、今から思うとそのときにはすでに死を決心していたのだと思います。」

柊園はうなずき、揉み上げをつまみながら眉間にしわを寄せた。

「公園に車で現れた男と言うのは？」

「刑事さんにお見せしたDVDに秋葉と一緒に映っていた男です。秋葉はその男を岸と呼んでいました！」

「なるほど・・・」

そう言つて柘園は次に滝川に向かつて言った。

「先生！ 先ほど礼子さんは来栖の声が収録されたCDと言いましたが、その声の部分の複製が出来ませんか？」

「複製？ ああ！コピーですね。 それはすぐに出来ますけど、刑事さんは携帯電話はお持ちでは・・・？」

「携帯？ 一応持つには持っていますが、それが？」

「携帯電話にはみな録音機能が付いているのですよ、そちらに録音し直せば持ち歩きも楽ですよ。」

「いや・・・私はいたつて機械音痴です・・・」

そう言つてもみあげをつまむ柘園から半ば強引に携帯を受け取り、滝川は持っていたCDウォークマンから来栖の声だけを抜き出すと、柘園の目の前で再生方法を何度も何度も繰り返し教えたのであった。そして数分後、柘園がなんとか携帯の操作を取得したところ、公園での猟奇殺人について、小林刑事とともに聞き込みを続けていた向井が血相を変えて飛び込んで来たのである。

向井は滝川と礼子に一瞬戸惑つたものの、二人に軽く頭を下げるとすぐに柘園に向き直り言った。

「警部補！ 公園滑り台事件のとき、付近で怪しい人物を見かけたとの情報が入りました。」

柊園のこめかみがピクリとひきつるような動きをみせた。

「なに！！ そりゃどんな男だ！」

「いえ、女です！」

「女？」

柊園は眉間にしわを寄せ揉み上げをつまんだ。

「はい、目撃者は公園近くのコンビニの店員で、話を聞いたところ店員自身が直接その女を見たと言っわけではなく、事件がニュースになったあと、店の防犯カメラの映像に写っているのがわかり、慌てて連絡をくれたそうです。」

向井はそこで一呼吸置くと、内ポケットから数枚の写真を取り出した。

「これがその女です、カメラの映像から見やすい角度のものを抜き出して写真にしてみました。」

その写真には白いコートの衿を立て、鰐の広い黄色い帽子を目深に被った女の横顔が写しだされており、立てられた衿と帽子の鰐が邪魔をしているため、鼻から口許くらいしか確認出来ないものの、女であることがはっきりと見てとれる。

柊園が手にとり、一枚一枚丁寧に見つめながら向井に問い掛けた。

「この映像が防犯カメラに写った時間と、男の遺体が滑り台の上に

置かれた時間は一致してるのか？」

「はい！ ピタリと一致しています。それから念のため、公園の近隣で写真を見せながら聞き込みを試みましたが、住民のだけれども ” 女の顔には見覚えがない ” との答えが返ってきました！」

「うむ・・・しかし遺体はどこか別の場所からあの場所に運ばれている、はたしてそんな事が女一人の力で出来るだろうか？」

そう言って、柁園が写真をテーブルに置いたとき、すっかり落ち着きを取り戻した礼子の口から ” あれっ！ ” と言う声が漏れたのである。

その声一同が顔あげると、礼子は写真を手にとり、食い入るように見つめたあと、柁園に向かって言った。

「刑事さん！ この女の人の・・・」

礼子の言葉に柁園は思わず身を乗り出した。

「ん？ 君・・・この女を知ってるのか？」

「いいえ、この女の人が誰なのかはわかりませんが・・・」

そう言って写真を見つめたまま礼子は首をかしげる。

向井が言った。

「礼子さん、その女の何が気になるんです？」

「はい！ この女の人がかぶってる帽子です！」

『帽子!?!?』

柘園と向井が同時に声を上げた。

礼子が続けて言った。

「そうです帽子です。 これはかすみが・・・かすみがお気に入り  
で、いつも出かけるときにかぶってたのと同じ物です。 それが・

」

「それが？」

「それが、かすみのご両親が荷物を引き取りに来られた時、どこを  
探しても見つからなくて・・・」

そう言って首をかしげる礼子を前に、向井が柘園を振り返った。

「警部補！ もしかして・・・」

「うむ・・・」

柘園は向井の目を見つめ黙ってうなずいたのであった。

その夜、鉄格子のはめられた狭い取調室で、来栖は蚊の鳴くような  
声で言った。

「ほんとに何も覚えてないのです。」

「お前なあ、もう一人の自分がやったなんて信じれるか・・・？」

佐古田が呆れ顔で言った。

あれから、駆け付けた警官により来栖は逮捕されたのである・・・だがその際、警官二人が軽症を負わされ、さらに一人が鼻の骨を折られている。

佐古田が困ったようにため息をつき、もじやもじやの髪の毛をかき回したとき、入口のドアが開き、苦虫を噛み潰したような表情で柊園が入ってきた。

「佐古さん、どんな様子だ。」

「どうもこうも・・・覚えないの一点張りで手を焼いとるよ。」

そう言っただけで再び佐古田が髪の毛を掻きまわすと、柊園がテーブル越しにうなだれて座る来栖に言った。

「そうか・・・それじゃ覚えている事を聞こう。実はガード下での事件前にうちの婦警がお前さんの姿を目撃しているんだが、そのときのお前さんは人相がわからないほどにヒゲを伸ばしてたそうだな？ それなのにガード下で警官に取り押さえられたときにはヒゲは綺麗に剃られていたそうじゃないか。逃亡中のお前がヒゲを剃らなければならなかった理由はなんなんだ？」

柊園のその言葉に来栖が一瞬ピクリと反応したかのように見えた。

来栖がゆっくりと顔を上げ柊園の目を見ながら口を開いた。

「刑事さん！ 刑事さんは今俺が逃亡中だと言いましたが、俺は警察から追われてる事なんか知らなかったし、第一逃げなければいけない理由さえ思いつかないんだ！ 俺はただかすみに迷惑をかけないように・・・俺は時々記憶がなくなるんだ、それでかすみに辛い思いをさせてしまって・・・だからかすみの前から姿をくらましたんです、ヒゲを剃ったのはかすみの死を知って俺も死のうと思ひ、天国でかすみに会うためにせめてヒゲくらいはと・・・」

「天国の恋人に会うためにか・・・フン！！ ならもうひとつ、かすみさんが亡くなった後、彼女がお気に入りだった黄色い帽子の行方がわからなくなってるんだが・・・お前さん心当たりはないか？」

「えっ！ いいいえ・・・俺には分かりません。」

「そうか。 お前さんなら何か知ってるんじゃないかと思ったんだがな。」

そう言つて眉間にしわを寄せ、突き刺すような視線を向けてくる柊園の目から逃れるように、来栖はうつむき、そして言った。

「刑事さん、俺は本当に何も覚えていないんだ、でもおそらく屋台でチンピラをたたきのめしたのも、2か月前の鴨川公園の浮浪者暴行事件も、犯人はこの俺だと思う。」

「ん！ 覚えていないのになぜそう思うんだ？」

「俺の中に・・・俺の中に何かがあるんです！」

そう言つて怯えたような目で枳園を見上げた来栖に、佐古田が横から大声を上げた。

「おい！ とぼけるのもいいかげんにしろよ。 屋台の周りを取り囲んでいた野次馬の誰もが、お前が自ら来栖だと名乗るのを聞いてるんだぞ！」

「わかつてます・・・でもほんとうに何も覚えていないんです。」

同じ言葉を繰り返すばかりの来栖・・・

「どちらにせよ、お前はしばらく帰れないぞ！」

佐古田はそう言つと席を立ち、窓の側に行き夜空を見上げた。

大都會の夜を彩り始めたクリスマスのネオンが、無能な警察をあざ笑つてるかのように、佐古田には思えてならなかったのである。

佐古田とわかれ、取り調べ室を後にした枳園は屋上へと足を向けた。

そこでは一足先にやってきた向井が待つていた。

「警部補！ 来栖の奴はどんな様子でしたか？」

「うゝむ・・・さつき奴の声を聞いたが、滝川先生が録音してくれた声とはまるで別人のようだった！ 礼子さんが言つてたように、奴は本当に二重人格なのかもしれんな。」

そう言つて柘園がポケットから取り出した煙草に火をつけたときだった、入口のドアが開き婦警の青木雪乃が、慌てた様子で駆けこんできたのである！

雪乃の顔には珍しく、あの愛くるしい笑顔はなく、身につけている服も制服とは違い、今時の女の子らしいワンピースのミニスカートをはいている。

そのいつもと違う雪乃の様子を見て向井が言った。

「おや！ 誰かと思えば青木君じゃないか、いったいどうしたんだい？」

雪乃はよほど慌てて駆け付けたと見え、大きく肩で息をしながら柘園の顔を見て言った。

「警部補！ 警部補のご指示通り来栖健二の生まれた村に行つてきました。」

その言葉に向井が驚きの表情で振り返つた。

「えっ！！ 青木君・・・警部補の指示つて・・・」

柘園はニヤリと笑つと、二人に椅子を進めた。

「向井！ 実はな、彼女が私の助手になりたいと言つてきかんのぞな、まあこのくらいなら危険はないだろうと、来栖の生い立ちを調べてくるようにと、私がお使いを頼んだんだ。」

「お使いって、そんなこと・・・中村課長にばれても俺は知りませんよ、いくら警部補とはいえ交通課の婦警を捜査に使うなんていくらなんでも・・・」

「まあ、お前は心配するな！」

おろおろとつろたえる向井をよそに柘園が雪乃に言った。

「それで青木君、何かわかったのかね？」

「はい！来栖の生まれ育った村でとんでもない事実が判明しました！」

「ん？ とんでもない事実？」

柘園は揉み上げをつまんだ。

雪乃はそんな柘園の目をまっすぐに見つめながら一呼吸置き、そして言った。

「警部補！ 来栖健二はもう一人の女の子”一枝（かずえ）”と頭部が結合した“結合双生児”として生まれています！」

『結合双生児！！』

柘園と向井は同時に声を上げた。

「そうです。私は来栖を取り上げた病院の医師に会って来たのです。そしてはつきりわかりました、来栖の頭の中にはもう一人の女の子が住んでいます。」

「女？」

そう言つて眉間にしわを寄せた柘園の横で、向井が思わず椅子から立ち上がった。

「青木君！ 来栖は確かに、暴力事件を起こしたのは自分の中の別人で、自分自身は何も覚えていないと供述を繰り返している、ただどいくらなんでもそれは！！」

そう言つて疑わしそうな眼を向けてくる向井を、雪乃はキツと睨みつけ、抱えていた書類を二人の前に差し出した。

「向井さん！！ 信じられないならこれを見てください、これが来栖の分離手術のときのカルテです。」

向井と柘園が身を乗り出し書類を手に取ると、雪乃は続けた。

「来栖健二は今から三十年前、中国地方の山間部にある五色村で生を受けました。 ですが長い間子宝に恵まれなかつた両親が小躍りして喜んだのもつかの間、生まれた子供は双子でその頭部が癒着していたのです。 それでも両親は希望を捨てることなく、その子達に健二と一枝と名付けました。 しかし、生まれ出てすぐ一枝の方は息を引き取り、男の子の方・・・つまり健二を生かすための分離手術が行われたのですが、二人の脳は一部を共有しており、しかもそのとき一枝の脳はほとんど成長しておらず、本来の5分の1ほどのサイズだったため、一枝の脳を切除することなく、健二の頭蓋骨に収めたんだそうです。 もちろん担当医も両親もそんな状態の赤ん坊が当たり前に生きられるとは思つておらず、その分離手術は授かつたわが子を、一日でも長くその手に抱いていたいという、切実

な両親の願いから行われた手術だったのです。」

カルテを読み終えた柁園が無言のまま揉み上げをつまむと、向井が首をひねりながら言った。

「こんなことって・・・じゃあ君は、来栖の言ってることは本当で、暴行事件を起こしたのは来栖の中の一枝と言う名の女だって言うのかい？」

「いいえ、それはまだなんとも・・・ですがもう一つ、来栖が生まれたその村には、村の名の由来となったと言われる”五色系の伝説”というのが残されていました。それがもしかしたら来栖の二重人格を裏付けるものになるかもしれません！」

「”五色系の伝説”？」

首をかしげる向井の横で柁園が目を開いた。

柁園は雪乃を見つめながら言った。

「話してみなさい。」

そして、雪乃が語ったその伝説とは・・・

\*\*\* むかしくむかしのことじゃった。 とある山間の村で次々と結核患者が現れた。

しかし、当時は医療技術はおろか、薬さえもない。

村人たちは病がつつるのを恐れ、頭を抱え思い悩んだ挙句、あるうことか結核患者たちを山中の山小屋に隔離してしまったのである！村人たちに見放された患者たちは、ただひたすら神に祈り死を待つ

しかなかった。

こうして、大勢の結核患者たちを見殺しにし、村人たちは病から逃れ、村には平和が訪れたかのようにおもわれた・・・しかしその時を境に、山村では作物は不作となり、家畜は次々と死んでしまうようになっていったのであった！

やがて村人たちは明日の食料にも事欠くようになり、誰もが絶望に打ちひしがれていたその時、村人たちの前に一人の僧侶が現れたのである！

「この村には魑魅魍魎が漂っておる！！」

僧侶はそう言っつて、結核患者たちが涙を流し死んで行った山を指差した。

「元凶はあの山にある！ ただちに山小屋を取り壊し、そこに寺を建ててのじゃ。」

村人たちは言われるままに寺を建て、結核に苦しみ死んでいった者たちを心から弔った！

すると、僧侶の読経とともに死者たちの塔婆からはいくつもの白い煙が立ち上ぼり始め、それがぐるぐると渦を巻きながら互いに絡み合い、やがて無数の煙は一本の煙柱となり、巨大な龍へとその姿を変えていった。

村人たちが固唾を呑んで見守る中、龍へと姿を変えた死人の御霊は、眼光鋭く村人たちを見据えたかとおもうと、突然カツと大きく口を開き、まばゆいばかりに輝く、黄金の玉を吐き出したのである。

村人たちから驚きの声がかかる中、龍は再び煙柱となり天高く舞い上がり消えていったのであった！

僧侶は、龍の吐き出した黄金の玉を手に取り村人たちに掲げて見せた。

それは幾千もの糸が絡み合い、玉のように見えた物……僧侶は絡み合う糸を丁寧にはぐし、木箱に入れた。

「村人たちよ！ 邪悪なるものたちは立ち去り、此処に五色の糸が生まれた……これより自身の手で五本の糸を取り護符に収めるのじゃ！ さすれば村人たちに平穏な日々が訪れる。だが！ けして“たがう”べからず！ 糸が五本より多かれど少なかれど災い來たる！！」

僧侶の読経の中、村人たちは順番に五本の糸を取り護符に収めて行き、村人たちがすべて取り終えたとき、僧侶も読経を終えた。

「五色の糸は人の五感をあらわすもの、これより先新しい命の宿るとき、妊婦は生まれ来る子のために、此処に來たりて五色の糸を護符に収めよ！」

村人たちは手を合わせ祈り続けた。

その後、村には平和が訪れ、僧侶は寺に住み、その生涯は2000年を超えたと言われている……！

むか〜し むかしの事じゃった！ \*\*\*

雪乃が話終え得ると二人の顔を交互に見つめた。

「と言うわけです。」

柀園が眉間にしわを寄せ揉み上げをつまんだ。

「うむ・・・と言うわけですよと言われてもなあ青木君！ 君の言いたいことが良くわからんよ、その伝説がなぜ来栖の二重人格を裏付ける事になるんだね？」

その言葉に雪乃がコクリとうなずいた。

「この話は、その村のお寺の住職から聞いた話で、五色糸とは出産直前の妊婦が寺に向き、生まれて来る我が子のために、人間の持つ五感を表す五色の糸を受け取るというもので、もちろん来栖も五色糸を持っていました。そしてそのしきたりとしては、住職が木箱の中に用意した複数の糸の中から、五本の糸を妊婦が自ら抜き取り、護符とともにお守りの中へ納めるのだそうです。村の言い伝えでは、この糸が何かの間違いで一本多くなった場合、人間を超越した神のような能力を持つとも、悪魔の力を身につけるとも言われており、そのお守りはそのときの子供が三十の歳を迎えるまで、両親が大切に保管することになっているのですが、来栖の場合両親は、彼が十九のとき不慮の事故で亡くなっております、来栖のお守りは住職のもとにあつたのだそうです。そして来栖が満三十歳を迎える今年の元旦に、神の元に返納するべく住職が中を確認したところ、なんと六本の糸が入っていたということでした。しかし、なぜ六本になっていたのかは、先代の住職が亡くなっている為原因はわかりません。そして、来栖が現在もこの街で元気に暮らしていることを住職に告げると、住職は目を丸くして言いました。“その奇跡こそが五色糸の神秘の力のなせる技なり”と。」

雪乃の話聞き終えた柗園と向井は、互いに顔を見合わせたまま、しばらく凍りついたように動けなくなっていたのであった。

つづく

## 頭の中の侵略者

### 第6章・頭の中の侵略者

柁園は、朝今から胸のむかつきを感じていた！ しかし彼の性格からか、そんなことは誰に告げるでもなく、時折襲ってくる軽い吐き気と戦いながら、浮浪者暴行事件の被害者たちが入院する国立病院で、滝川医師の録音した来栖の “ お前死ねえ ” という声を6人に聞かせていた。

その結果6人全員が怯えたような表情になり、みなが口をそろえて事件当日に聞いた声と同じであるとの証言が得られたのである。

そしてその後、6人に礼を述べると、柁園はその足で駅の方角へ向かって歩き出した。

右手でしくしくと痛む胃のあたりを押さえながら、苦虫をかみつぶしたような表情で30分ほど歩きつづけただろうか、やがて柁園が本通りを抜け、住宅地を横切る脇道へと入るとすぐコンビニが見えはじめ、その角を曲がると、そこにはこぢんまりとした人気のない公園が現れたのである。

そこは岸田杜夫の首切り死体が発見された場所であり、そのためからか、普段なら子供たちを遊ばせるお母さんの姿で賑わっているはずのこの時間帯でさえ、まるで別世界のような静けさを見せている。

柁園は立ち止まり、揉み上げをつまむと、やりきれないといった表

情でポツリとつぶやいた。

「なんてことだ！ 犯人の奴は、岸田の命だけでなく、子供たちの無邪気な笑顔までも、奪い取ってしまったのか。」

”ゆるせん！”

柁園の胸に、沸々と怒りが沸き上がっていた。

柁園は公園内を見回しながら、ゆっくりと滑り台の方に近づいていく。

階段や手すりなどにこびりついていた血液は、現場検証のあと綺麗に洗い流されてはいるものの、階段の上り口には、子供が上り下りできないようにと親たちが設置したのであろうロープが張られており、柁園は滑り台を見上げ、右手で胸をさすった。

“この上に遺体に乗せるとなると、やはり女の力では無理だ！ 犯人は複数犯で仲間がいたのか？ いや、複数で行動したならば必ず目撃情報があるはずだ、コンビニの防犯カメラにはあの黄色い帽子の女の姿しか映っていなかった。”

柁園はもう一度滑り台を見上げ、張られたロープをまたぐと階段を上って行った。

最上段に立ちぐるりを見回す。

柁園はコンビニの建物を振り返った。

“犯人は防犯カメラの死角を移動したのか・・・？ いや、この公園は周囲を網状のフェンスで囲まれていて、決められた入口からしか立ち入ることは出来ない！ もし入口を目指せば、必ずカメラの視野に入る。”

“もし別の場所からフェンスを乗り越えたとしたら・・・！？”

柊園は眉間にしわを寄せ揉み上げをつまんだ。

“いや、たとえ犯人が女ではなく別の男だったとしても、遺体を抱えてフェンスを乗り越えることなど不可能だ！”

“やはりあの写真の女が犯人と考えるのが妥当なのか・・・？”

“ん！ しかしまてよ！ あの写真の黄色い帽子の人物は、本当に女なのだろうか？ 我々が見た目だけの先入観にとらわれ過ぎているだけなのではないだろうか？”

心の中で呟きながら、岸田杜夫の首が向いていた方向に視線を向けたとき、500メートルほど先の国道を挟み、白い3階建の建物が見えた。

その瞬間、柊園のこめかみがピクピクと激しく反応した！

“あ・あれはメゾン・ソレイユ・・・！？ 加島礼子と死んだ香坂かすみが暮らしていたアパートだ！”

柊園の揉み上げをつまむ指に力が入った！

“これは偶然か、それとも犯人が故意に・・・？ メゾンド・ソレイユを見る生首・・・行方が分からなくなったかすみ帽子と来栖の頭の中に住むという一枝の存在・・・そして犯人とおぼしき女・・・これは・・・だとしたら！？”

メゾンド・ソレイユを睨みつける柘園の脳裏に一つの仮説が浮かび上がり、揉み上げをつまみ、眉間にしわを寄せたまま、滑り台の上で凍りついたように立ち尽くす柘園警部補であった。

要領を得ない受け答えを繰り返す来栖健二に対し、医療観察法に基づく精神鑑定が行われたその結果、生活の不安定から陥った鬱症状による心神喪失であるとの判定が下された！

“心神喪失とは、精神の障害により事の是非善悪を弁識する能力（事理弁識能力）又はそれに従って行動する能力（行動制御能力）が失われた状態であり、心神喪失状態においては、刑法上その責任を追及することができないとされている！”

屋上の喫煙所でタバコをふかす柘園の前に、中村課長が仏頂面で現れた。

「まつさん、来栖健二は“心神喪失”と診断されたぞ！」

「なにい？」

柘園が苦虫をかみつぶしたような表情で振ると、中村は啞えていた

禁煙パイプをスカスカと音を立て何度も吸い込んだ。

「奴は明日にでもいったん釈放だ。」

柙園は煙草を灰皿に投げ込むと慌てて立ち上がった。

「釈放？　ちよつとまで、奴の頭の中には……」

「まつさん！　あんたの言いたい事はわかってる……しかし、頭の中に別の女の脳があつて、そいつが来栖の二重人格を生み出してるなんてな話、いったい誰が信じるんだ？」

「いや……そりゃ私だつて、そんな話をまるつきり鵜呑みにしているわけじゃないが……」

「それになあまつさん、奴が暴れてるのを目撃した人の証言では、来栖に現れたのは間違いなく男……しかも凶暴な鬼のような男で、間違つても女なんかじゃないんだ。」

「しかしだな……」

「しかしもかかしも、五色系の神秘の力か何か知らないが、今の段階ではそんな日本昔話みたいな理由で奴に精密検査を受けさせることは出来ないんだよ！　たとえ出生証明書にどんな記載があるうが、それが直接犯人説にはつながらないし、それをもし強引に精密検査を受けさせたりして来栖が無関係だった場合、人権蹂躪だなんだのと世間が警察に対して騒ぎだすのが落ちだぞ！」

「課長！　私は今日、浮浪者事件の被害者である山岸元雄に会って録音しておいた来栖の声を聞いてもらったんです、彼らは6人とも

口をそろえて事件の日に聞いた声にそっくりだと、怯えた表情で答えましたよ！ 来栖は間違いなく暴行事件の犯人だ、それに首切り事件も奴が犯人である可能性が以上、世間の風当たりがどうのここの言ってる場合ではないだろう？ ここはあなたの課長の肩書で・・・」

「そんなことしてみろ、私もあなたもたちまちお払い箱だ！」

中村がそう言つて、啞えた禁煙パイプをピクピクと上下に動かしたとき、突然柘園の表情が険しいものになったかと思うと、荒々しい口調で課長に掴みかかったのである！

「あなたは単なる腑抜けの人形か？」

柘園に突然胸倉を掴まれ、一瞬戸惑いを見せた中村であったが、すぐに落ち着いた口調で言つた。

「おいおい、まつさん！ 落ち着け落ち着け、あなた最近どうかしてるぞ、いつも冷静なあなたがいつたいどうしちまつたんだ？ 時間にはたつぷりあるんだ、何もそう結論を急ぐことはないだろう？」

言われて、興奮状態だった柘園がハツと我に返つたように中村から手を離すと、中村は啞えていた禁煙パイプを側にあつたゴミ箱に投げ込み真剣な表情で言つた。

「まつさん！ 私はあなたを信頼してる、出来る事なら今すぐにも来栖の頭をたたき割つて、あなたの話が真実であることを上の連中に証明したいさ！ でもなまつさん、桜の代紋背負って生きてる以上“我々兵隊は、上からの指示に従うしかないんだよ！”」

中村の言葉に、柗園は口を真一文字に結び、悔しそうに宙を睨みつけるのであった。

昼食を終えた向井が一階ロビーの販売機で一息ついていると、そこに春日婦警が現れ、憂鬱そうな表情で向井の隣に腰を下ろし“ハッ”と一つ大きなため息をついた。

その様子に向井が言った。

「どうしたんですか春日さん？　なんか元気がありませんけど。」

「向井さん、聞いてくれます？　青木さんのことなんですけど。」

「青木君！？　彼女がどうしたんですか？」

「あの子、どうも最近世間で起きてる猟奇事件なんかに興味を持って、一人でこそこそ調べてるみたいなんですよ！」

「へえ……」

「へえなんて、感心してる場合じゃないですよ、あの子無鉄砲なところがあるし一課の捜査の邪魔にでもなったら、主任の私の責任問題なんですから！」

そう言って春日婦警がもう一度溜息をついた時、廊下の奥のドアが開き、制服警官2人に両腕を掴まれた来栖が、二人の前を通りかかったのである！

警官の話し声が二人の耳に聞こえてくる。

「上からの命令で、こいつ釈放らしいぞ……。」

「ほんとか？ あれだけの騒ぎを起こして……。」

「ああ、何でも被害者の男が被害届を取り下げたそうだ。」

「なんでまた？」

「よくわからんが、被害者の男が、先に手を出した自分が悪いと申し立てたらしんだが、本当のところは、報復を恐れたことじゃないかって事だ。こいつの豹変が、よほど恐ろしかったんだろうなあ。」

「いや、しかし……他にも、公務出向妨害に器物損壊が……。」

「ああ、俺もはっきり確認したわけじゃないから詳しくは知らんが、聞くところによると、どうもこいつ心身症らしい……。」

春日婦警は、来栖が連れて行かれるのをじっと見ていた。

その様子を見て、向井が不思議そうに尋ねた。

「どうしました？」

「向井さん！ あの人の……この前向井さんが編集していたコンビの防犯カメラに映っていたという、あの写真の女に似てる気がしませんか？」

「えっ！ 来栖が？」

向井は春日の言葉に慌てて立ち上がり、遠ざかる来栖の姿を視線で追いながら言った。

「うゝむ・・・俺には似てるようには見えないけど。春日さん、一体どのあたりが似てると思うんだい？」

「えっ・・・いや・・・あの・・・どこがどうって言われると困るんだけど、あの男の人が持っている雰囲気って言うか・・・なんて言うか・・・」

春日婦警はそう言っつて首をかしげながら続けた。

「あっ！ すみません向井さん、私変なこと言っつて。多分私の思い違いです、気にしないでください。」

春日はそこでいったん言葉を切り、くるりと向井の方に向き直った。

「それより向井さん、青木さんのことだけど、あの娘今日もお休みを取ってるんですよ、おじいさんの法要だとか言っつてたけど、本当かどうかわかりやしないし・・・もしあの娘が捜査に首を突っ込んだりしたら、遠慮なく怒鳴りつけてやってくださいね。」

「はははっ！ 五月病の新人社員じゃあるまいし、そんな嘘で勤務を抜けたりしないでしよう？ とにかく彼女の事はまかして、馬鹿なことしたら俺がきついお灸をすえてあげますから。」

「ほんとにお願いしますよ。」

春日はそう言うのと向井に頭を下げ、さも忙しそうにその場をあとにしたのであった。

その後ろ姿を見送る向井の脳裏には、写真の女と来栖が似ていると言った春日婦警の言葉が、なぜか妙に胸騒ぎのような感覚で焼き付けられていた！

来栖健二は釈放されると、その足でガード下へと向かった！

時刻は午後二時、ガード下の行きつけの屋台にはまだ暖簾がかかっておらず、来栖が屋台の裏側へと回ると、そこにはおでんの仕込みをする親父さんの姿があつた！

「親父さん！」

来栖が後ろから声をかけると、親父は振り返り、一瞬驚いたように大きく目を見開いたが、すぐに気を取り直すと前掛けで手を拭いながらニツコリと笑った。

「おお、あんたか！ 新聞で読んだよ、あんた病気で釈放されたんだってね？」

その言葉に来栖は深々と頭を下げ言った。

「親父さん、この前は本当にすみませんでした、親父さんに随分と迷惑をかけてしまつて。」

「なぐに、確かにあのときは驚いたけどな、なにしろいつもおとな

しいあんたが人が変わったようになってしまったんだからなあ！ だけど釈放されてよかったよ、ほら、あんたが叩きのしたあいつ、ありゃこの辺りじゃ有名なチンピラでね、散々飲み食いしたあげく何かしら難癖つけては金を払わないもんだから、わたしら同業者はみな困り果てておったんよ。それがあんたのおかげでこのところ姿を見かけなくなってね、本当はこっちが礼を言いたいくらいですよ。

「

言いながら親父は胡麻塩頭を撫でると、屋台の棚から一升瓶を取り出し来栖の目の前に突き出した。

「せっかく来たんだ、一杯やって行きなよ！」

「いや俺金ないし、それに今日は親父さんに一言謝るために・・・」  
来栖がそこまで言ったときには、親父はすでに酒をコップになみなみと注いでいた。

「けち臭い事言うもんじゃないよ！ ほれ、よくヤクザ映画とかで見かける出所祝いつてえの？ あれですよ、これはわたしからの出所祝いだ、金なんかいらねえよ！」

「お・親父さん・・・ありがとうございます。」

深々と頭を下げる来栖の目には涙が光っている。

「はははっ！ わたしもあんたも社会の落ちこぼれ同士、水臭いこと言いつこなし、つまみは昨日のおでんの残りしかないけど、遠慮なくやりなよ。」

親父はそう言って笑うと、そばにあったビールケースをひっくり返し、その上にコップ酒を置いた。

警察での拘留期間中に体内からは酒が抜け、まるで自分の身体ではないような不思議な感覚に陥っていた来栖は、親父の言葉がこの上なく有り難かった。

そして出されたコップ酒に震える手を差し出したとき、またしても来栖の頭に異変が起きたのである！

一瞬目の前が真っ白になり、激しい耳鳴りとともに、伸ばした手を引っ込めさせようとする力が働きかけて来たのだ。

それはまるで自分の手が強力なゴムのような物で縛られ、後ろに引き戻されているといった感じであり、キーンと言う金属音のような耳鳴りに掻き消され、うまく聞き取ることが出来ないものの、耳の奥からは誰かが自分に語りかけている声が響いている！

” な・なんなんだこの感覚は？ 声の主は誰なんだ？ ”

来栖が頭の中の声に語りかけた。

” またお前か？ お前は何者なんだ！ ”

すると不思議なことに、それに答えるように男とも女とも、大人とも子供ともつかない声が返って来たのである。

” 私が誰かって？ ハハハッ！ 何を言ってるんだ、私はお前じゃないか。 ”

”なんだと！ふざけるな！ お前は何がしたいんだ、なんで俺を苦しめるんだ！”

”ハハハ！ お前が苦しむのは、お前がいつも酒を呑んでるからさ、身体の中に酒さえ入っていなければ、辛い思いなどすることなく入れ代われたものを。”

”入れ代われただと！ やはりお前が俺の身体を乗っ取るうとしてるのか？”

”乗っ取るだって？ ハハハ！ 言っただろう私はお前だって、自分で自分の身体を乗っ取ると言うのはおかしな話だ。 お前はただ酒を吞まずに眠っていてくれさえすればいいんだ。”

“くそく わけのわからんことばかり並べやがって、俺の右手を自由にしろ！”

そう言つて動かなくなっていた右手に神経集中させていた来栖は、自身の左手がなんとか動かせることに気が付いた！

来栖は動かない右手にさらに力を加えた、するとそれに逆らうように頭の中の何者かも力を加えてくる。

そして頭の中の何者かが、右手の固定に気を取られた一瞬のすきを突き、来栖は動かせる左手でコップを掴むと注がれた酒を一気に喉へと流しこんだのだった！

頭の中で甲高い声が響いた！

“うげっ！！ くそーせっかく酒が抜け始めていたのに・・・”

そう言うと、鳴り響いていた耳鳴りは嘘のように消え去り、目の前には何事もなかったかのようにおでんを見つくる親父の姿があったのだった。

親父が来栖を振り返った。

「どうだい、久しぶりの酒はうまいでしょう？」

ニツコリ笑いながら言う親父に、来栖はもう一度頭を下げた。

「はい、ごちそうさまでした！ 本当に親父さんにはお世話になりっぱなしで……」

「いってことよ。それよりほれ、これはわたしの露天商仲間からのあんたに対するカンパ金だそうだ、一人五百円で六人からだから三千円入ってる！」

言いながら親父は封筒を差し出した。

「えっ！ そんな!!！」

「チンピラを追い払ってくれたあんたへのみんなの気持ちだ、ありがたく受けとついたらいい。」

そう言って親父は、恐縮する来栖のズボンのポケットに封筒をねじ込んだのであった。

その様子をガード下の薄暗い場所から青木雪乃婦警がじっと見つめ

ており、さらにそのはるか後ろからは三人の私服警官が雪乃を見つめていた。

しかし、そんなことは気付くそぶりさえ見せず、来栖は屋台を後にするとふらふらと線路沿いの道を歩き始めた！

“どこへ行く気だろうか？”

雪乃が私服のミニスカートを翻し、気付かれないよう細心の注意をはらいながらならばしばらく後を追っていると、健二は何を思ったのか突然小さな花屋の軒先でピタリと足を止めたのである。

そして、ポケットから先ほどの封筒を取り出し何やら店の女の子に話しかけている。

電柱の陰に身を隠しながら、雪乃は思った。

“まさか、あの女の子を突然襲ったり・・・！？”

雪乃は、右手の拳をきつく握り締めた。

“大丈夫！ 彼女はこの私が必ず助けてみせる！ もし私が来栖を捕まえたら、刑事課への転身も夢ではないはず。”

雪乃の妄想は大きく膨らみ、大きな目をクリクリと動かしながら、ニヤリと笑った。

「女刑事 雪乃 参上！！」

思わず大声を出し、慌ててあたりを見回す青木婦警であった。

しかし一番慌てたのは離れてついてくる三人の私服警官だったが、幸い来栖には気づかれることはなく、そして来栖もまた店の女の子を襲つたりはしなかった。

来栖は女の子にお金を払うと小さな花束を受け取り、またもふらふらと歩きだしたのである。

雪乃の第六感が訴えていた。

” この男、何かおかしい……。もしかして、来栖が首切り殺人の犯人では……。？！”

そのまま尾行を続けていると、花を抱えたままの健二がやがてたどり着いたのは、かすみ飛び降りたあのビルの前であり、そこにはかすみの両親が娘のために建た献花台があった。

かすみの献花台に花を手向け、手を合わせる健二の様子を、雪乃は隣のビルの角に置かれた自動販売機の陰からうかがっていた。

雪乃の耳に来栖の声が聞こえてくる。

「かすみ……。お前の言ったとおり、俺は二重人格かもしれない！そのせいでお前も……。ごめん……。ごめんよ……。」

来栖が投身自殺した恋人、香坂かすみの献花台の前で大粒の涙を流し、ガツクリとその場に膝まづいた時だった。

“くっくっくっ！ 健二！ お前ってやつは本当にめでたいやつだ

なあ。”

頭に殴られたような衝撃が走り、またしても謎の声がどこからともなく聞こえてきたのである。

「だれだ!！」

“だから俺はお前だよ、何度も言わせるな!”

辺りを見回したが誰もおらず、声は自分自身の頭の中から聞こえてくる!

「うっうっ・・・やめろやめろ・・・」

来栖は頭を抱えその場にうずくまった・・・その瞬間、頭の痛みがまるで霧が晴れるかのようにスーッと消えて行ったのである。

そして

“健二・・・けんじ・・・”

今度は突然、来栖の頭の中で女の声が響いたのである。

“健二お前はいい子だ、私はまさかあの屋台で、お前が酒を一杯だけで済ませるとは思わなかったよ。”

その声は来栖の口から発せられており、隠れて見つめる雪乃の耳にも届いていたのだが、離れた場所に身を潜めた私服警官には聞こえていないようだ。

“あれっ・・・かすみさんと話してるのかしら？ それにしては、なんか様子が変だな。”

来栖の不可思議な行動の一部始終を見ていた雪乃が、さらに聞き耳を立てたとき、突然携帯が鳴り響いた。

）  
）  
）

電話は親友の珠美からだった。

一瞬あわてた雪乃だったが、相変わらずしゃがみこんだままの来栖を確認すると、通行人を装い、そばにあった販売機にもたれかかり、通話ボタンを押した。

そしてあくまでも自然に会話を交わしたあと、携帯をぱちんと閉じ  
“フッフ” と雪乃がため息をついたとき、その横を焦点の定  
まらぬ目をして、ふらふらと来栖が通り過ぎたのであった。

そのころ、来栖健二の心神喪失での釈放に納得のいかない柘園警部補は、一人臨港苑に潜り込み、来栖が無断で利用していたと思われる部屋のドアを開けた。

そこは、六畳一間の赤茶けて毛羽立った畳みの上に、染みだらけの煎餅布団が敷かれており、その周りに空の酒瓶が数本ころがっているだけの、とても人が暮らして行けるとは思えない状況であった。

柘園が漂って来る独特の饅えた匂いに顔をしかめながら、部屋に入り煎餅布団をめくりあげると、布団はじつとりと湿っており、長い

間放置されている事を物語っている。

”やはり小林刑事の報告通り、奴は何処か別の場所をめぐらしているのか？”

柘園は眉間にしわを寄せ揉み上げをつまんだ。

”それでも課長の奴、来栖に尾行も付けずに釈放するとは、おまけにこの私に向かって、疲れた顔をしてるから暫く休めとぬかしやがった。何を考えてるんだまつたく！”

柘園が中村課長の言葉を思い出し、苦虫を噛み潰したような顔で揉み上げをつまみ部屋を出ると、薄暗い廊下の先に、なにやら他の部屋とは造りの違うかなり広い部屋があるのに気付いた。

”ん！あれが食堂か？”

柘園は先程の匂いに吐き気を覚えたのか、ゆるゆるとみぞおちの辺りを摩りながら食堂とおぼしき広間へと入って行った。

部屋の隅には木製のテーブルや椅子が無造作に積み上げられており、カウンターの奥の棚には食器類がそのままの状態で残されているようだ。

足元を見ると床は埃が積もり、心ない侵入者たちの足跡が所狭しとつけられている。

柘園が部屋の中央に立ち、ぐるりと周りを見回したとき、なぜかその視線がカウンターの奥に吸い付けられるかのように、ピタリとその動きを止めたのである！

柀園は一点を見つめながら首を捻った。だがそのときの柀園の目には何が映ったわけでもなく、長年の刑事の感が何かを訴えかけているのである。

”ん？ あの食器棚・・・なぜあの場所に置かれているんだ？”

柀園がゆっくりとカウンターに近づいた。

カウンターの向こうは厨房だったらしく、錆だらけのガスコンロと、その横に大きなシンクが置かれており、ここで調理をしていたとすれば、食器棚の位置が明らかに不自然に思える。

何故ならばシンクに向かって立ったならば、食器棚はその背後になるため、忙しく動き回るには至って邪魔になるのだ！

柀園はカウンター越しに中を覗き込んだ。

見ると食器棚の側面の床には、何度も引きずったであろう後がくつきりと残されている！

”この棚は明らかに何者かが位置を動かしている、しかも頻繁に！”

柀園は揉みあげをつまんだ。

そしてカウンターの中に入ると食器棚の側面を力任せに押したのである。

すると “ズズズズズ” 嫌な音を立てながらも食器棚は思い

のほか簡単に動き、棚の後ろからは、頭を低くしなければ通れない背の低いドアが現れたのだった。

ドアを開き中をのぞくと、そこは地下に降りる階段が取り付けられており、下は食材置き場と従業員たちの仮眠室をなっているようで、壁のどこかに明かり取りの窓が取り付けられているのだらう、薄暗いものの電灯はなくても部屋中が見渡せた。

突当たりには業務用の大きな冷蔵庫が置かれ、そのわきに仮眠用のベットが備え付けられており、明らかに人が寝起きしていた形跡が感じられる！

“ここが来栖の本当の隠れ家だったんだな！”

柁園は慎重に辺りを見回した、するとなにやらベットの横の壁に取り付けられているものが目に止まった。

“ん！ あれはなんだ？”

柁園はさらに目を凝らし、やがてうす暗さに慣れてくると、徐々に壁の物体がはつきりと見え始めた。

“あつ！ 帽子・・・あれは、無くなつたかすみの帽子か？”

柁園が揉み上げをつまみ、階段を下りるべく一歩足を踏み出した時だった、背後に人の気配を感じたかと思うと、その何者かに背中を強く押され、バランスを崩した柁園は一気に階段を転がり落ちていったのであった。

「うぐっ・・・」

柊園の口からうめき声が漏れた、頭を強く打ったのか意識は朦朧としている。

「それまでだ！ 動くんじゃない！」

柊園の耳に階段の上の方から男の声が聞こえ、その後どたばたと数人の格闘するような音が響き、すぐに辺りは静まり返った。

そして・・・

「警部補！ 大丈夫ですか？」

柊園の耳に今度は女の声が聞こえてきた。

女は心配そうに柊園の顔を覗き込んだが、その時はすでに目は閉じられ、身体は小刻みに震えている。

「警部補！！ しつかり・・・お願いですから目を開けてください。」

女の悲痛な叫びが耳に届いたのか、薄れゆく意識のなか柊園が目を開くと、すぐ間近に女の顔があり、その大きな目がクリクリと動いているのが、なんとか確認できた。

しかし、そこまでが限界だった・・・

そして数時間後、柊園は警察病院の一室で目覚めることとなったのである。

「おっ！ 気が付かれましたか。」

ベッドに身を起こした柘園に気付き、担当医が声をかけてきた。

「ここは？ 私はいつたい・・・？」

辺りを見回しながら起き上がろうとした柘園だったが、くらくらと激しいめまいに襲われ、慌ててベッドの手すりにつかまった。

「柘園さん、もう少し横になっていたほうがいいです。MRの結果に危険はありませんが、頭を激しく打っているので2、3日は目眩が治まらないと思いますよ。」

担当医は手を差し伸べながら、そう言ってニッコリと笑った。

それでも、なんとか上半身を起こしベッド上に座ると、柘園はもみ上げをつまみながら言った。

「いや、もう大丈夫です。少し吐き気はしますが、私はどうも病院でやつが好きになれなくて。」

「はははっ。初めてお会いしましたが、うわさどおりのお人ですねえ。まあ、後遺症の心配もないようですし、お帰りになるのかまいません・・・ですが、その前にちょっとお聞きしたいんですが、柘園さん、あなた最近・・・なんというか、腹部の辺りに違和感を感じたり、極端に食欲がなくなってるなんてことはありませんか？」

担当医の問いかけに、柘園のこめかみがピクリと引きつるような動きを見せた。

「いや・・・特にありません。飯もうまいし酒もうまいですよ。」

「そうですね。それならいいのですが、腹部の辺りを触診させてもらったとき、指先に妙な感覚があったもので・・・いや、おそらく私の思い過ごしでしょう。」

そう言って笑う担当医を横目に、柘園はベッドから立ち上がると、深々と頭を下げた。

「大変お世話になりました。」

「いいえ。それより気をつけてくださいよ。薬が切れると断続的に目眩がしますから、くれぐれも飲み忘れないようにして、3日後には再検査も必ず受けてください。それから、もし腹部に異常を感じたら、いつでも私に相談してください。」

「ありがとうございます。」

柘園はそう言って、再び頭を下げると、担当医に見送られながら警察病院を後にしたのだった。

柘園が警察病院の建物を出ると、ワンピース姿の青木雪乃婦警が、待ちかねていたように駆け寄ってきた。

「警部補！」

「おお、青木君！ どうしたんだこんなところ？」

「どうしたんだって、覚えてないんですか？ 私が警部補を助けたんですよ！」

青木雪乃婦警は大きな目をクリクリと動かして見せた。

「なんだって・・・君が？」

雪乃が、不思議そうに首をひねる柊園の顔を覗きこんだ。

「あっ・・・そういえば、あの時一瞬君の顔を見たような気がするが・・・あれは夢じゃなかったのか・・・ん？ まてよ、だけど何で君が？」

柊園はもみ上げをつまんだ。

「えへへ。とにかくここじゃゆっくり話せないから、私と一緒に来てください。」

そう言つて雪乃は、大きな目をクリクリと動かし、渋る柊園を半ば強引にハンバーガーショップへと誘つたのである！

セットメニューを注文し席につくと、柊園はややうつむき気味で、辺りを気にしながら小声で言つた。

「青木君！ こういう店は私には合わんだらう・・・」

「ウフフ！ どうしてですか？ 周りみんなカップル、私達もカ

ツプルだし・・・何も違和感はないとおもいますが！ なんなら、コーラのストロー二本にしてみましたしょうか？」

そう言っただけこちらを見つめながら、いたずらっぽく笑う雪乃を見て、若い娘と顔を寄せ、1つのコーラを飲む自身の姿を想像した柊園は“エヘン”とひとつ咳払いをすると、あわてて眉間にしわを寄せた。

「なっ・・・何を馬鹿なことを・・・それよりさっきの話・・・」

「フフ！ どうして私が臨港苑行ったかってことですよ。それは、中村課長に言われたからなんです。」

「課長が？ なんで？」

「警部補、課長にきついこと言ったでしょ？ 課長すごく気にしましたよ。」

「私はただ、自分の意見を言ったまでだよ。 だけど、それと君が臨港苑に来たことと、どう繋がるんだ？」

そう言っただけ、柊園はもみ上げをつまんだ。

「実はこの前、主任の春日さんに、私が集めていた事件の資料を見られちゃったんです！」

「ああ、そのことなら私も向井から聞いてるよ。」

「ええ、でもそれが中村課長の耳に入ってしまったって、呼び出されて・・・私でっけり怒られると思ったんです。 でもそうじゃなかった。」

課長はさつきも言ったように、警部補の言葉を気にしてたんです。それで私にこう言いました。“まっさんの様子が変なんだ！どうもいつもの冷静さを失っているように思う。そこで刑事志望の君に折り入って頼みがある・・・まっさんは間違いなく来栖のねぐらを突き止めに行くはずだ。しかし、今のまっさんと来栖を1対1で合わせるのは危険すぎる！警官を3人つけるから、君は来栖を尾行して、来栖の前にまっさんが現れるまで見張っていてくれないか。”で。」

「そうだったのか・・・課長のやつ・・・」

“我々兵隊は、上からの指示に従うしかないんだよ！”悔しそうにそう言った、中村の顔を思い浮かべながら、考え深く遠くを見つめる柘園に、雪乃は大きな目をクリクリと動かしながら言った。

「またあ！そんな難しい顔しないでくださいよお。せつかくこんな可愛い娘とデートしてるんですから。」

雪乃の声が大きかったため、周りの客がこちらを見ているような気がした柘園は、口元に人差し指をあて小声で言った。

「デ！・・・デートって君！！・・・とにかくわかった・・・わかったから、そんなに大きな声を出さなくてくれ！まだ頭がくらくらするよ。」

「ウフフ！まあ理由はどうあれ、警部補を助けたのは私ですからね！お礼に、ここはおごってくださいよ。」

雪乃はそう言って、いたずらっぽく笑ったのであった！

こうして再び警察に身柄を確保された来栖健二は、臨港苑に隠し持つていたかすみの帽子の一件から岸田杜夫殺害の容疑が固まり、精神科医 滝川秀二の協力のもとに脳の精密検査が実施されることとなったのである。

柊園は雪乃をハンバーガーショップに残し、一人店を出た。西の空では傾き始めた太陽が、ビルの谷間から半分だけ顔を覗かせている。

“どうもあの娘といると、調子がくるっついていかな。”

もみ上げをいじりながら空を見上げ、ポツリと呟いた柊園警部補であった。

つづく・・・

## 柘園警部補の推理

### 第7章・柘園警部補の推理

精神科医 滝川秀二の協力のもとに来栖健二の留置所内での数日間  
に及び観察と精神鑑定が実施されたが、その間の来栖の人格はとて  
も不安定であり、それは滝川とともに観察に携わった素人である向  
井刑事の目でも明らかに複数の人格が混在しているように映り、  
本来の健二である時間は日に日に短くなっているように思われた。

そしてその後、来栖は身柄を警察病院に移され、専門医による頭部  
の精密検査が行われたのち、再び拘置所へと戻されたのである。

検査結果を待ちかねていたかのように、柘園が拘置所内に入ってい  
くと、鉄格子の向こうでは、身体を丸めるように座り、壁を見つめ  
身動き一つしない来栖の様子を見つめる滝川医師の姿と、部屋の隅  
のデスクで何やらしきりにペンを走らす向井の姿があった。

「ご苦労様です。」

柘園が声をかけると滝川が振り返った。

「そろそろ来られるころだろうとお待ちしておりました。」

「先生、来栖の精密検査の結果は・・・？」

「はい、やはりあなた方がおっしゃる通り、来栖健二の頭の中には  
二つの脳が存在することが判明しました！」

柊園のこめかみがピクリと反応した。

「そうですか、やはり一枝は生きていたんですね!」

「ええ、こちらに写真レントゲンを用意しておりますのでどうぞご自身の目で確認してみてください。」

そうやって滝川が向井の方にちらりと視線を向けると、向井がコクリとうなずきデスクの上に置かれたシャーカステン（X線写真を見るためのライトボックス）の電源を入れた。

「警部補、こちらに来てこいつを見てください。」

シャーカステンの前には1枚のレントゲン写真が張り付けてある。

柊園が手招きをする向井の隣に腰をおろし、眉間にしわを寄せながらレントゲン写真のほうに身を乗り出すと、向井が滝川に言った。

「先生お願いします。」

滝川はコクリとうなずいた。

「柊園さん、先ほども言いましたようにこの写真では来栖の脳が二つ確認できます。」

言いながら滝川は、その写真の一部を指差して見せたのである。

「こちらが本来の来栖健二の脳です、しかし見てわかる通り、健二の脳はもうひとつの脳、つまり一枝と名乗る女の脳に押しつけられ

るように萎縮し始めております。」

「萎縮・・・？ 健二の脳が小さくなつてると言うのですか？」

「その通りです、それとは反対に一枝の脳は大きくなりつつあり、このままでは健二の身体が一枝に支配されるもの時間の問題かと思われます！」

柊園はもみあげを触りながら眉間にしわを寄せた。

「一枝が健二の身体を支配！？ しかし・・・来栖健二は二重人格で、一枝とは別にもう一つ頻繁に現れてくる男の人格が存在するはずなんですか・・・？」

その言葉に滝川は左右に大きく首を振った。

「いいえ！ 来栖は解離性同一性障害・・・つまり俗に言う二重人格ではありません！ もし来栖に男の人格が現れたのだとすれば、それは健二の中の一枝の脳が存在そのものを否定され虐げられ続ける心的外傷から逃れようとした結果、解離により個人の同一性が損なわれ、解離性同一性障害にかかって・・・」

と、滝川がそこまで言った時だった、わけがわからないと言った表情で首をひねりながら困ったように向井の顔を見る柊園に、向井が言った。

「警部補！ ようするに滝川先生がおっしゃりたいのは、ここに一つの身体を共有した健二と一枝という二人の人間が存在するとして、二重人格なのは健二ではなく一枝だということですよ！」

「なんだと、一枝が・・・？」

柊園はまるで向井を睨みつけるかのような目をして揉み上げをつまんだ。

滝川が言った。

「その通りです！」

柊園の表情がますます険しいものになった。

「では、浮浪者暴行事件の時、そして屋台での傷害事件の時に現れた男は、一枝の分身だというのですか？」

「そうです、その時の男・・・ややこしいので一枝にたいしその男を一男と呼びます。全ての事件は一男が引き起こした事なのです。」

「うゝむ・・・！　しかし先生、それだと秋葉と浮浪者6人はなぜ殺されなかったのかという疑問が残りますが？」

「そこが健二でなく一枝が2重人格であることの証ですよ、なぜならば2重人格というのは片方の人格が活動を始めるともう一方は眠っている形となり、意思の疎通はもちろんその存在そのものを知らないのが一般的です、しかし健二は男の存在はもちろん一枝の存在にも気付いていた、ですから健二の脳そのものには異常がないと言えるのです。そして浮浪者事件の時暴れる一男を止めたのも健二の意思です、健二のなかの善の力が無意識に一男に働き掛け、その動きを封じ込めたのです！　秋葉の時もまた同じことが言えるでしょう。」

「健二の無意識の力？ うゝむ・・・そうか、それで健二は何も覚えてないの一点張りだったのか！」

「はい、この写真を見る限りでは、何も覚えていないと言った来栖の証言に嘘はないと言ってもいいと思います。」

柘園は揉み上げをつまんだ。

「では先生、一男が凶暴な性格であるということは、その本体とも言える一枝もまた凶暴だと考えた方がいいのですね？」

「いいえ、それはちがいます。」

滝川はそう言っただきく左右に首を振り、柘園と向井の顔を交互に見ながら続けて言った。

「柘園さん、向井さん、お二人はビリーミリガンと言う男をご存知でしょうか？ 彼も多重人格でした・・・しかも驚いたことに、なんと彼は24人も的人格を持っていたのです。しかもその24人の人格は性格だけでなく、1人1人性別も年齢も言語までもが異なり、1人1人名前を持っていました。そしてある日、そのうちの1人”フィリップ” が性犯罪をおこし逮捕されたのです・・・警察当局はビリーの多重人格を芝居ではないかと疑い、徹底した検査が行われましたが、真似できないようなイギリス訛りや、煙草を吸う人格などそれぞれの人格に入れ替わり、でまかせとは思えないものだったため検事や弁護士、精神医学者には演技ではないと信じられました。そして、結果は24人は全て別人であるとの見解が出されたのです！ ですから一枝に現れた男の人格も一枝とは全く違う性格を持っているといえるのです！」

二人の刑事は顔を見合せたまま言葉を失っていた。

そこに “ コンコン ”

ドアがノックされ3人が振り返るとドアが開き、制服に身を包んだ婦警の青木雪乃が大きな目をくりくりと動かしながら顔をのぞかせたのである。

「失礼します、滝川先生にお客様をお連れしました。」

そう言つて雪乃は後ろに立つ人物に手で合図を送ると、3人に再びお辞儀をして持ち場へと戻っていき、残された人物がそれと入れ替わるように歩み出た。

「あつ君は!!」

向井の口から驚きの声が漏れた。

入つて来たのは紛れもなく、加島礼子だったのだ!

思わず顔を見合わせる柘園と向井に、礼子は深々と頭を下げた。

「刑事さん! その節は大変お世話になりました。」

突然のことに困惑しながらも、柘園は満面に笑みを浮かべて言った。

「おお、礼子さん! すっかり顔色も良くなって、元気そうじゃないか。」

「はい、おかげさまで。」

「そうか、それはよかった……ところで君がなぜこんなところに？」

柊園の問いに礼子の顔が少し赤らんだように見えた。

それを見て滝川が言った。

「柊園さん、彼女は私に昼食を持って来てくれたのです。というのも、実はあれから色々と彼女と話し合い、私たち結婚することになりました……！」

滝川は礼子の過去を知りながら全てを受け入れ求婚し、そして礼子もまた、その滝川のやさしさに触れ、共に生きる事を決意したのであった。

柊園の顔が今まで向井が見たことがないほどにほころんだ。

「そうですね！ それはおめでとつございます。」

「いや……礼子君とは親子ほどの歳があるもので、なんともお恥ずかしい。」

「な〜に、そんな夫婦は今時わんさといえますよ。」

にこやかに言いながら、柊園が礼子の前に歩み出た。

「礼子さん、良かったですね。これからは先生と一緒に素晴らしい研究を続けて行ってください。」

向井も横から嬉しそうに笑いながら続けた。

「かすみさんのためにもね。」

二人の言葉に、礼子は照れ臭そうに笑みを浮かべ、大きくうなずいて見せた。

「はい！ 刑事さんの期待を裏切るような真似は決してしません、色々ありがとうございます。」

そう言つてほほ笑む礼子の横顔を見つめながら、滝川が満面に笑みを浮かべ二人に頭を下げた時だった、眠っていた来栖が目を覚ましたのである。

ヨロヨロと立ち上がるその物音に気づき一同が一齐に振り返ると、鉄格子の向こうでは浅黒い顔の男が不気味な笑みを浮かべこちらを睨みつけていた。

滝川医師がゆつくりと近づいた。

「君はだれだ？ 健二君じゃないね？」

そう言つて鉄格子の方に身を乗り出したとき、突然男の腕が鉄格子の間から伸びたかとおもうと、滝川医師の胸倉を掴み物凄い力で引っ張つたのである！

その途端、滝川医師の頭が鉄格子に打ち付けられ ”ガチャン” と激しい音をたてた。

“キヤッ・・！！”

部屋中に礼子の悲鳴が響き渡った。

だが引き寄せる力が強いいためか、滝川はもがくだけで一向に離れない！

慌てた柘園と向井が滝川の後ろからしがみつき、引きはがそうと渾身の力で踏ん張ったが滝川の身体はびくともしない。

向井が男に向かって叫び声を上げた。

「この野郎、お前は一男だな？ 先生を離せ！」

大声で叫ぶ向井の横で柘園が後ろでおろおろと立ちつくす礼子に言った。

「礼子さん！ そのこのデスクの上のボールペンをくれ！」

「あつ・・は・はい！」

礼子が手渡すと、柘園はいったん滝川の身体から離れ、鉄格子の向こうから掴みかかる毛むくじやらの手の甲目掛けボールペン突き立てた！

”ウグツ！！”

一瞬声を発したものの男の力は緩むことなく、鬼のような形相で柘園を睨みつけたかと思うと、右手の甲から真っ赤な血を滴らせながら空いている左の拳を、鉄格子の隙間からまるで電光石火の如く柘園

の顔面に叩きこんだのである！

”グシャツ”

鈍い音とともに、柵園は声を発する間もなく後ろの壁まで吹き飛び、そのままバランスを崩しバツタリと倒れ込んでしまった。あまりの衝撃に柵園はピクリとも動かない！

向井は柵園の様子を視線で追いながらも、グイグイと鉄格子に引き寄せられる滝川の身体から離れるわけにはいかなかった。

「あつ！ 警部補・・・くそー離せえく、その手を離しやがれこの化け物。」

毒づく向井に対して男はニヤリと笑うと、滝川を掴んだ手にさらに力を加えて来る・・・鉄格子に押し付けられる滝川の顔からは血の気が失せ、その口からはうめき声が・・・。

その時、礼子の悲鳴が再び部屋中に響いた！

「やめてく 先生が死んじゃう！」

泣きながら必死にしがみつく礼子を見て、鉄格子の向こうで男の口から笑い声があがった。

「はっはははあ、俺は誰にも止められん。」

そう言ったかと思うと、男はさらに口元を歪め、ぐったりと力が抜けた滝川医師に向かい、腹の底から搾り出すような声で言った。

「お前死ねえ！」

その言葉を聞いた途端礼子が半狂乱となり大声で叫んだのである。

「やめて〜 放して〜 お願い！ 健二さ〜ん！！」

泣きながら叫んだ礼子の声に男が一瞬ピクリと反応したような動きを見せた。

「ん？」

“うぐぐぐ”

何があつたのだろうか？ 男の口から声が漏れ、その途端一同を睨みつけていた鬼のような目が、何かを感じたようにキョロキョロと宙を泳いだかと思うと、滝川の胸倉をつかんでいた右手がプルプルと小刻みに震え始めたのだ。

男が見えない何者かに向かって憎々しげに言った。

「ま・またお前か・・・いつもいつも邪魔ばかりしやがって！」

男の手の震えはますます激しくなり、その一瞬の隙をついて向井と礼子が滝川の身体を渾身の力で引っばった、その途端滝川の身体が男の手から離れ、3人は勢い余りバタバタとその場に倒れ込んだのである。

それでも男は狂ったように暴れ続けている。

「うお〜っ！！」

鉄格子の向こうでは男が頭を抱えて真つ赤な顔で遠吠えにも似た声を上げ、一方では解放された滝川が息を吹き返し激しく咳き込んでいた。

“ゲホツゲホツ”

息苦しそうにしながらも滝川は目を開き、礼子はその身体に抱きついた。

「先生！」

向井も肩で息をしながらよろよろと立ち上がると、壁際で動かない柘園のもとに駆け付けた。

「警部補！」

その声に柘園が顔を上げブルブルと左右に首を振った、思ったより怪我は軽症のようだ！

「警部補、大丈夫ですか？」

「あ・ああ大丈夫だ・・・しかしすごい力だな、一瞬角材でぶん殴られたのかと思っただぞ。」

言いながら柘園がハンカチで鼻血をぬぐいながら立ち上がると、礼子が滝川の弁当とともに持って来ていた救急箱から冷却パッドを取り出し柘園に手渡した。

「おお、これはすまない。礼子さん、私は大丈夫だ。それより

先生を頼む、後は私と向井で・・・あなたは先生を連れて早く医務室へ。」

「はい!!」

柊園は冷却パッドを受け取り、殴られた右頬をおさえながら来栖にゆっくりと近づいて行った。

そして、注意を払いながら覗き込むと、鉄格子の向こうでは冷たいコンクリートの床にへたりこんだまま、健二に戻ったとみられる男がハアハアと大きく肩で息をしている。

滝川が礼子の肩につかまり部屋から出て行くのを見送り、柊園が言った。

「お前は健二だな？ おかげで助かったよ礼を言う。」

来栖はよほど体力を使ったのか、疲れきった表情で柊園を見上げただけで何も答えない。

柊園は続けた。

「健二、鴨川公園での浮浪者暴行事件、そしてガード下でのチンピラ暴行事件が起こった時、お前は何も覚えていないと言ったな？」

健二はうつむき、相変わらず何も答えようとしなない。

柊園は冷却パッドをデスクの上に返し、再びポケットから取り出したハンカチで濡れた頬を拭くと、来栖に対し探るような視線を向けた。

「だがお前が何も知らないと言ったのは嘘だ！ お前はお前の中に住む一男の存在に気づいていた、だがそれを認めたくなかったんだ。ちがうか？」

来栖が顔をあげた。

「一男・・・？ わからない。ただ俺は、時々自分の身体が何者かに乗っ取られたみたい、俺の意思とは違う動きをすることがあって・・・それが刑事さんの言う一男なのかも知れませんが、俺は俺自身に何が起きてるのかわからず、ただこわくて・・・それで・・・」

「そうか、それは確かに不安にもなるだろう。だがたった今お前ははつきりと礼子君の声を聞き、暴れる一男を押さえ付けたんだ。」

「えっ！ 礼子さんの？」

「そうだ、礼子さんの声でお前は目覚めたんだ、そして暴れる一男を抑えつけたんだ。」

「俺が暴れる男を？ あっ・・・そう言えば、さっき俺はどこかわからない真っ白い世界でフワフワと宙を漂ってるかのような感覚で、夢を見てるのか起きてるのかさえ区別がつかない状態だった。」

その時かすみの俺を呼ぶ声が聞こえて・・・ かすみの声で、それで俺は・・・」

「そうか、お前のは礼子君の声がかすみさんの声に聞こえたんだな。」

「あれは礼子さんの声・・・俺はかすみか・・・かすみか・・・」

来栖は唇をかみしめうつむいたまま、ぶるぶるとその身を震わせた。

「・・・来栖、お前は病気なんだよ!」

そう言つて柊園は向井を振り返つた。

「向井! 来栖に例の物を。」

言われて向井はデスクの引き出しから、以前青木雪乃婦警が来栖の生まれた病院から貰つてきたカルテ及び出生証明のコピーを取り出し、鉄格子の間から差し入れたのである。

「来栖! これはお前が生まれた時の記録だ、お前の頭の中には一枝と言う名の姉がいる。」

その言葉に来栖が衝撃を受けると思つていた二人の刑事の考えとは裏腹に、当の来栖は手渡された書類にチラリと視線を走らせただけで、驚くそぶりさえみせなかつたのである。

そんな来栖に、柊園が揉み上げをつまみながら言つた。

「どうした? あまり興味がなさそうだが、お前もしかしてこの事を知っていたのか?」

来栖は悲しげな目をして書類を柊園に返しながら言つた。

「いいえ、はつきりと知つていたわけではありません、でも・・・」

「でも、なんだ？」

「俺がまだ村にいた頃、何度か耳にしたことがありました。俺の頭には姉さんの脳が入っていると・・・」

「ほう、ではお前は一枝の存在には気づいていたんだな？」

「いいえ、今改めて刑事さんに言われ、その事を思い出したと同時に、時々俺の頭の中に響いていた女の声が姉さんの声だったんだと気づきました。」

来栖の答えに、柘園のこめかみがピクリと大きく反応した、と同時に来栖はまるで何者かに突き飛ばされたかのように頭を前後にガクンと動かしただかと思うと白眼を開けたままガツクリとその場に気を失ってしまったのである。

突然の思いもよらぬ展開に、署内は一時蜂の巣を突いたような騒ぎとなり、来栖健二は警察病院へとその身を移された。

そして専門医の診察の結果、健二の脳が成長し続ける一枝の脳に圧迫されたことによるショックからの失神であるとの診断が下されたのである。

一方、柘園は殴られた顔面の手当てのため医務室にいた。

殴られた痛みをこらえていたせいか、治療中胸のあたりにムカつきを覚えたため担当医の勧めでしばらくベットで横になっていたのである。

そこに向井刑事が心配そうに現れた。

「警部補！ キズのほうはいかがですか？」

「おお向井、私なら心配いらん、横になっただらすぐ落ち着くだろう。それよりお前のほうこそかなり疲れが顔に出ておるぞ、来栖につきつきりであり寝とらんのだろう？ 仮眠室にでも行ってしばらく眠ったらどうだ？」

「いいえ、俺は大丈夫です。それより警部補、先生と二人で来栖から聞きだした話から今回の事件を俺なりにまとめてみましたので聞いてもらいたいのですが！」

「ほうう！ さっき留置所のデスクでなにやらメモったのはそれか？」

「ええ、いつどちらが現れるかわからないので、先生だけが聞いた話と俺だけが聞いた話、そして二人一緒に聞いた話を整理して、そこに俺なりの解釈を入れてみたんです。」

「ほう！ 向井刑事の推理と言うわけだな。」

柁園はそう言っていたはずらっぽく笑い揉み上げをつまんだ。

「いや〜．．まあ推理まではいらないかもしれませんが。」

そう言うと向井は、上着の内ポケットから黒い電子手帳を取り、おもむろに電源を入れた。

「警部補、まずは公園浮浪者暴行事件についてですが、当時、来栖

健二の頭の中で一枝の脳が成長過程にあったとおもわれます。その一枝は成長とともに健二に成り代わり、表に現れようと考え、不定期ではあるが表に現れるようになり、そのたびに健二は身に覚えのない嫌疑をかけられ、それにつれ徐々に生活が荒れ始め、その現実から逃れるため酒に溺れていたんです！ 浮浪者に暴行を受ける健二と身体を共有する一枝は痛みを感じていたが、前日の酒が残っていたため、じっとこらえていました。なぜならば一枝は異常なほどに酒を嫌うからです！」

「酒を嫌う？ なぜそう言いきれるんだ？」

「誘導自己暗示です！！！」

「誘導・・・滝川先生のか？」

「そうですね、一枝が現れた時先生が誘導自己暗示・・・いや、正確には何やらCDからメトロノームのようなリズムを刻む音を聞かせ、暗示にかけたのだと言っていましたから、誘導自己暗示ではなく良くなる催眠術と考えた方が正しいのかもしれませんが。それでわかったことなのですが、分離手術を終えた健二がまだ小さかった頃、さきほど健二自身の口からも出ていましたが、近所の人たちの噂話を聞いています。その噂と言うのが両親は部類の酒好きで健二が結合双生児になったのは両親の酒のせいだ、というものでした。」

「そんなことまでわかるのか？」

「はい！ 先生の暗示は、本人の記憶の奥底にあつて普段は全く思いつけない部分を引き出すのだそうです。」

「ほーう！...！」

柀園はベットに上半身を起こし揉み上げをつまんだ。

向井は続けた。

「その健二の幼少期の記憶が、結合した一枝の脳にも届いていたのです！」

「なるほど、酒のせいで結合双生児として生まれ、生まれながら戸籍さえも抹消されたことが一枝の酒嫌いの原因と言うわけだな？」

「その通りです、一枝は自身の存在を生まれながらに否定され続けた事と、酒のため自身の存在を殺し続けた事にストレスを感じ、そのストレスが解離性同一性障害の引き金となり、男の人格（一男）を生み出す事となったんです。そんなわけで、一男は抑圧された一枝の怒りそのものであるため、狂暴な人格として現れ浮浪者を叩きのめしてしまっただんですよ！」

「それを健二が無意識に止めたというわけか……！」

「そうです！ 秋葉の時もガード下での暴行事件の時も同じことが言えると思います。」

「うむ……では滑り台の岸田杜雄は？」

「はい！！ それも一男が行ったことではないかと考えています。」

「なに……一男が？」

「ええ、これまでの調べだと来栖健二は富士見会の経営する富士見

ローンに借金があるようです。しかし、仕事の無い健二からは支払いが無いだけでなく、連絡さえとれなくなり、そしてその取り立てを受け持ったのが岸田だったんです。岸田が健二の居場所をさぐりあて、臨港苑に出向いたそのとき、健二の中に一枝が目覚めていたが、岸田の目には女装した来栖としか映らなかつたんじゃないでしょうか？そして岸田の事を知らぬ一枝のはぐらかすような返事に岸田は怒りを露にし殴りつけた。岸田に殴られ、まだ不安定な一枝の人格は一男へと入れ替わり、一男は岸田がヤクザ者だと知っているため、そばにあつた果物ナイフで背中から一突き、ナイフは心臓に達した！」

「じゃあなぜ首を切断し、わざわざ危険を冒してまで公園の滑り台の上に置く必要があつたんだ？」

「首を切り落としたのは一枝です！」

柊園が眉間にしわを寄せ揉み上げをつまんだ。

「ん！？なぜ一枝だと？」

「おそらく、岸田殺害後一男から一枝に再び入れ替わつたのです！しかし目覚めた一枝の目の前には背中にナイフが刺さつたままの岸田の遺体が・・・一枝は自分が殺したと思い込んでいます。

そして、処分しなければせつかく健二と入れ変わる事が出来ても死刑になるかもしれない、そんな考えが頭を巡つたのだと思います、そして押入れにあつたポストンバックに岸田の遺体押し込んだ、しかしどうしても頭部だけが収まらない！そこで一枝は、臨港苑の今は使われていない浴室で頭部を切断！頭部は怨恨を匂わせるため、口に天罰と書かれた紙を押し込み、紙袋に入れた。そして遺体を公園の滑り台に遺棄すると一枝は臨港苑へと帰り、本来の

人格来栖健二に戻りそのままガード下の屋台へ向かい、例の暴力事件に……。」

柊園の目が鋭く輝いた！

「向井！ 今の部分は一枝の証言か？ それともお前の考えか？」

「えっ……は・はい！ 一枝の話に俺の考えを加えたものですけど。」

「じゃあ、お前が話したのが本当に一枝だったと言いきれるのか？」

「いや……そういわれると……！」

向井の報告に柊園は揉み上げをつまみ喰り声をあげた。

「うむ……では向井！ もうひとつ聞くが、お前の言うように一枝が岸田の遺体を運んだとして、それは何のためだ？」

「えっ……ですから怨恨を匂わすために……。」

そこまで言った向井だったが、ベットの从上から突き刺すような視線を向けて来る柊園に思わず口ごもった。

「偽装のためか？ ならどうしてあの公園なんだ？ なぜ滑り台上なんだ？」

柊園に言われ、向井は言葉に詰まった。

「いや……それは……。」

「いいか向井、お前は先程岸田の首を切断したのはトランクに入らなかったためだと言ったな。それと同じで、物事には全てにおいて何らかの理由と言うものが必ずあるものだ、したがって遺体が滑り台の上に置かれたのにもちゃんとした理由があるんだよ！」

そう言った柘園の目からは先程までの鋭さは消え、その目は心なしか悲しげにさえ見えた。

柘園の目から何かを感じた向井が言った。

「あの、警部補……もしかして貴方には犯人の目星がついているのではないですか？」

そう言って身を乗り出して来る向井に柘園は言った。

「まあな、しかしこれも仮説に過ぎんが、岸田を殺したのは一男でもなければ一枝でもない、私は犯人は来栖……来栖健二だと思うぞ！」

柘園の思わぬ答えに、向井は驚きを隠せなかった。

「えっ！！ 健二が……」

「そうだ！ 私は岸田の遺体が置かれていた滑り台の上に立って見た、そうしたら何が見えたと思う？」

「滑り台の上から見えたもの？ そうですね、俺も登ってみてんですが、あそこは民家に囲まれていて、似たような建物が見回せるだけであとは東の方向に国道が走っていましたね、そのほかは特に

気が付きませんでしたけど。」

柁園は眉間にしわを寄せ揉み上げをつまんだ。

「私が気になったのはその国道の向こう側に建っている白いアパートだ！ あの公園のすべり台からは3階建ての白いアパートが見えた、そのアパートの名はメゾン・ド・ソレイユ・・・かすみさんと礼子君が暮らしていたアパートだよ。岸田の首はまるで死んで行ったかすみさんに見せるかのような形で後ろ向きに置かれていた、そのことからみても、かすみさんへの罪滅ぼしに健二がやった事だと言えはしないか？」

「罪滅ぼしですか・・・」

「さつき健二は私に言われるまで自分の中の一枝の存在に気付かなかったと言った、しかしそれは奴の嘘だ！ 健二は少なくとも取り立てのために岸田がやってくる直前には一枝の存在に気付いていたはずだ！」

「なぜそう言えるのですか？」

「それはたぶん、かすみか秋葉達に辱めを受けている様子を、たまたま一男と入れ替わった一枝が目撃していたんじゃないかと思う、その記憶を健二の脳に送ることで自分の存在と、かすみの自殺の原因を健二自身の目で見ていたかのように伝えただよ！」

「なるほど・・・たしか滝川先生も、一枝の脳の成長具合からみてそろそろ意志の疎通が可能だろうと言ってました。」

「うん、やがては互いの記憶が混ざり合い、健二の記憶を持つ一枝

に生まれ変わるともな！」

「はい！ そうか、それで健二が岸田を殺害し、かすみさんへ見せるためにわざわざあの公園の滑り台に……？ ん？ ちょっと待ってください警部補、それだと話がおかしくなりませんか？ コンビニの防犯カメラの映像には黄色い帽子をかぶった女がはっきりと映し出されていたんですよ。」

「その女は自分の中の一枝の存在を知った健二が、一枝に成りすました姿だ。 かすみさんの黄色い帽子は一枝が……おそらく一枝がおしゃれをしたくてかすみさんの部屋から盗み出したのだろう。」

それを利用したんだよ。」

「女は健二の成りすましですか……しかし警部補はどうしてそう思われたのですか？」

柊園の目の奥がきらりと輝いた。

「髭だ！ 健二の髭だよ。」

「髭？」

「そうだ！ 向井、お前は気付かなかったか？ 留置所の中で健二が一枝と入れ替わったとき、その顔つきだけでなく髪もしなやかに見え、その口元からは髭どころかひげそり後まで消えてなくなっていたらどう？」

「あつ！ そうです、確かにその通りで、不思議に感じた俺が先生に尋ねたところ、健二と一枝の場合は人格が変わるのではなく脳そのものが入れ替わるため、女性ホルモンの影響で顔も体つきつきも

変わり、そしてまた髭も見えなくなるのだとか。」

「私が言いたいのはそのだよ、健二が・・・いや一男がガード下の屋台でチンピラをたたきのめし逮捕された時、奴の髭はきれいに剃られていた。だが青木君が目撃した時には人相がわからないほどに無精ひげを伸ばしていたそうじゃないか、それがなぜ剃られていたか？ それは一枝ではなく健二自身が女に成りすますのに必要だったからじゃないのか？」

「そうか！ もし一枝が犯人なら浮浪者同然の健二が髭をそる理由がないですからね！」

「向井！ 滝川先生が言うには、来栖が次に目覚めた時には健二ではなく一枝として目覚めるだろうって事だ、そうなるともう健二の記憶も一枝が持っているはずだ。お前は一枝が目覚めるのを待って、一枝から私の今の話の裏付けを取ってくれ！」

「はい！」

力強い返事とともに向井が部屋を飛び出し、残された枳園は胸のむかつきに一人ベットで顔をしかめるのであった。

つづく・・・

## 目覚め

### 第8章・目覚め

警察病院の一室で、二日間眠り続けていた来栖健二の意識が回復したとの連絡があり向井刑事が駆け付けると、そこには一人の女が悲しげな面持ちでベットに座っており、複数の制服警官がその周りを取り囲んでいた。

枳園から聞かされた仮説を頭で整理しながら、意気揚々と駆け付けた向井刑事だったが、部屋に入り女と目があつた瞬間思わずハッと息をのみ立ち止まってしまったのである。

” えっ!?! まさか! これが・・・一枝?”

来栖健二が一枝として目覚める事は、滝川医師から説明があつたものの、これほどまでに完璧に容姿が変わると思つても見なかつたのである。

健二がまだ主導権を握っていたところに現れていた一枝は、良く見なければ区別がつかないほどの変化であつたのだが、今、向井の眼前にいた一枝は、健二の面影こそ残すもののまるで別人の雰囲気醸し出しており、天井から吹きおろす空調の風にその髪をしなやかにゆらし、透き通るような白い肌にはほんのりと赤みを帯びた細い唇をキュッとむすんだまま向井を見つめていた。

向井は驚きを隠せないといった様子でゆっくりと一枝に近づいて行

った。

「き・君は一枝さん・・・でいいのかな？」

女が向井の目を見てコクリとうなずいて見せた。

「君は自分がなぜここにいてるかわかっていますか？」

今だ半信半疑のままの向井が尋ねると、そこで初めて一枝が口を開いた。

「わかっています！」

それは悲しげではあるがしつかりした口調だった。

その声に、向井はなんとか現実を受け入れる事が出来た。

「そうですね、それでは一枝さん！ 今から俺の質問に教えてください。」

向井がそう言って電子手帳を開くと、一枝は相変わらずその目に悲しげな色を浮かべながらも、再び大きくうなずいて見せたのである。

一枝は向井が問い掛けるたび遠くに視線を移し時折目を閉じる。おそらく健二だった頃の記憶を自分自身の記憶と同期させているのであるう、それはまるで引き出しの奥の何かを探り出しているかのようだった。

一枝は協力的であり、向井の投げ掛ける質問に一つ一つと答えて行った、その結果枳園のたてていた仮説がほぼ的中していた事がわか

ったのである。

話終えた向井は、枡園警部補の洞察力に驚くと同時に、改めて尊敬の念がその胸に沸々と沸き上がって来るのを感じていた。

その頃枡園警部補は、胸に違和感を感じながらも屋上の喫煙所で一人街を見下ろしていた。

先日までクリスマススムード一色だった街も、今は正月の準備にせわしなく動き回る人々の姿で溢れかえっている。

その様子を視線で追いながら、枡園がゆっくりと煙草の煙りを吐き出したとき、入り口のドアを軋ませ中村課長が現れたのだった。

「まつさん、どうだい傷の具合は？」

「ん！ ああ、まだ多少は痛みますが、どうって事はないですよ。しかし人間、歳はとりたくないもんだな、若い頃ならこの程度の傷は一晚寝りゃケロッツとしてたもんだがねえ。」

そう言っつて枡園が中村を振り返ると、中村はくわえ煙草からユラユラと細い煙りを立ち上らせている。

枡園が中村の顔をしげしげと見つめながら言った。

「ん？ あんたどうしたんだ、あれほど禁煙するんだと頑張ってたのに、もう諦めたのか？」

「えっ・・・ああこれの事か。」

中村はくわえていた煙草を右手でつまんで見せた。

「これは新しく買った禁煙パイプだよ！ 中に電池が入っててな、吸ったら先に火がついてるように赤くなるんだ、煙りのように見えるのは水蒸気らしいぞ。」

「けっ！ そうまでしなきゃ禁煙出来んなら禁煙なんて辞めとけ、健康のためかなんかしらんが、あんた百まで生きるつもりか？」

「まあそう言ってくれるな、私も好きで禁煙してる訳じゃないんだ、辞めないとカミさんと娘に責められてなにかと肩身がなあ・・・。」

「はははっ！ 職場でも家でも辛い立場だな。」

「またつくだ！ ところでまっさん、ここに来たのは他でもない、今向井から連絡があつて・・・あつ、そうだ！ あんたまた携帯の充電切らしてるだろう？ 向井がいくらかけてもかからんとぼやいとつたぞ。」

「ん？ 充電？ そんなことするか、充電は向井がすることになつとるんだから・・・それより、向井は何と言って来た？ 一枝から話しは聞いたのか？」

「ああ、一枝は思いのほか協力的で、投げ掛ける質問にもスラスラと答えてくれたそうさ。で結果まっさん、あんたの読み通りだったよ！」

そう言った中村の言葉に、柁園は眉間にしわを寄せ揉み上げをつまんだ。

中村は続けた。

「しかしあんた相変わらず鋭い読みをするなあ、向井も感心してたよ。」

そう言った中村の言葉が聞こえたのか聞こえていなかったのか、柁園はまるで興味がないといった表情で中村を振り返った。

「課長！ 健二がコンビニのカメラに映っていたときに着ていた服は、やはり一枝が？」

「うん・・・一枝は女としてオシャレがしてみたかったんだ、帽子はもちろん、あのとときの服も一枝がかすみさんの部屋からこっそり持ち出していたものだそうさ。そして、あんたをりんこうあんの階段から突き落としたのも一枝だ！ あのとときはまだ一枝の脳が安定していなかったため、健二との記憶の共有も不完全だった、そのため一枝はあんたが健二を追ってる事を知らず、自分を捕まえに来たと勘違いしたんだ！」

「・・・そうか一枝がなあ・・・」

柁園はやりきれないといった表情で再び街に視線を移した。

「ところで課長！ 健二と入れ代わった一枝はこのあとどうなるんだ？」

「うーむ・・・どうやら検察側は一枝と健二は同一人物とみなし、

このまま健二で起訴までもって行くつもりのようなな。」

「何だと！？ そんな馬鹿なことがあるか！ 来栖の場合はただの二重人格ではなく、脳そのものが入れ代わってしまったわけだし、誰が考えても健二と一枝が同一人物なんて答えは出ないはずだ。」

「確かにその通り・・・その通りだとは思いますが、とにかく我々は事件を解明しその詳細をまとめるまでか仕事だ、そのあとは検察側の判断に任せるしかない。」

中村が寂しそうにそう言ったとき、眼前に立つ柊園の身体に異変が起きた。

柊園は膝から突然力が抜けたかのようにその身体をガクンと沈めたかと思うと、目の前にあつた屋上の手摺りにもたれ掛かり、腹部を押さえたまま苦悶の表情を浮かべたのである。

柊園の額には玉のような脂汗が光り、小刻みに震える唇はその色を失っていた！

「ま・まつさん！！」

くわえていたパイプを投げ捨て、中村が慌てて駆け寄ったと同時に、柊園は白目を剥きその場にバツタリと倒れ込んだのであつた。

人格の安定した来栖一枝の事情聴取が正式な形で執り行われ、事件の全貌が解明した。

この前代未聞の出来事にマスコミは我先にと警視庁になだれ込み、建物の周りはテレビクルーに埋めつくされ、次々とたかれるストロ

ボの光に顔をしかめながら、数十本と束ねられたマイクの前に中村課長が立つと、腕章を着けたレポーターが待ち兼ねていたかのようにバタバタと駆け寄ってきたのである！

「中村さん！ 来栖健二は二つの脳を持っていると言っていますが、それは間違いのない事実なのですか？」

「今健二はどうなってるのでしょうか？」 「もう一つの男の人格は？」 「一枝の中にまだ健二はいるんでしょう？」

次々と突き付けられるレポーターの質問に、中村は目を閉じたまま口を開こうとはしなかった！

中村の様子に、騒がしかったレポーター達も次第と静かになり、そして数分後青木雪乃婦警が書類の束を抱え入ってきたのである。

「お待たせいたしました。」

雪乃の声に中村は目を開いた。

「ご苦労様。」

中村は雪乃の持って来た書類を一枚、自分の手にとりながら続けて言った。

「青木君、これをお集まりのみなさんにお配りしてくれました。」

そう言ったあと、中村はエヘンと一つ咳ばらいをすると、レポーター達に向かい書類を指し示して見せたのである。

「えーみなさん、今回の一連の事件の全容についてはすでに警察から発表があった通りですので私の口からは何も申し上げる事柄はございません。なお現在担当刑事である柘園茂男警部補が体調不良のため、詳細については今お配りしている書類のほうにまとめさせて頂きましたのでそちらをごらんください。」

中村はそう言うと、せつせと書類を配る青木婦警の肩をポンと叩きニッコリと笑って見せた。

「じゃあ青木君！ あとはよろしく！」

そう一言告げると雪乃にクルリと背を向けたのである。

「えっ！ そんな・・・課長・・・困ります。」

慌てた雪乃がそう言って大きな目をクリクリと動かした時には、中村の姿はすでにドアの向こうへと消えていたのだった。

向井刑事は警察病院のロビーで柘園警部補を診察した担当医と話していた。

「先生、警部補の病気はいったい何なのですか？」

そう言って真剣な眼差しで見つめる向井に、担当医は鼻の下に蓄えた口髭を人差し指で撫でながら言った。

「向井さん、正直申し上げて、柘園さんには胃癌の疑いがあります！」

「胃癌？」

「はい、もちろん詳しく調べてみなければ断定は出来ませんが、枘園さんの現在の様子からみてかなりその可能性が高い気がします。しかも重度の……」

「そ・そんな……俺は警部補とほとんど一緒にいましたが一度もそんな様子は見られませんでしたよ。」

「そこなんです！ 普通癌が進行して末期に近づくと、食欲を失うだけでなく激しい痛みが伴い、到底普段通りの生活を送るなんてことは不可能なんです。しかし枘園さんは同年代の一般的な男性と比べても、捜査で駆け回っているうえ異常な痩せかたもしていないし、あなたを含む関係者の誰に聞いても、特別辛そうにしていた事はないと言うことでした、ですから私としてはそこに希望の光を置き、誤診である事を願っているのです。」

「そうですね！ きつとそうですね。警部補に限って癌だなんてありえません。」

「そう願いたいものです。」

「で先生！ 詳しい検査のほうはいつ？」

「はい、明日の午後からの予定です。」

「明日ですか……元旦早々で心苦しいところですが、どうかよろしく願います。」

向井は担当医の目を見つめ深々と頭を下げた。

「それはもちろん・・・盆だろうと正月だろうと病気は待つてはくれません、私もこの仕事を選んだ以上そんな物には無縁だと心得ているつもりですよ。」

担当医はそこで一呼吸置き、持っていたカルテを開くと向井に言った。

「ところで向井さん！ 柊園さんは御家族はいらっしゃらないのでしょうか？」

担当医の問いに向井はハッと息を飲んだ。これまで長く行動をともにしてきた向井だったが、柊園の私生活をまるで知らない事に気づいたのである！

” 警部補の家族・・・いや、それどころか俺は警部補の出身地さえ知らない・・・ ”

言葉に詰まった向井を見て担当医は指先で口髭を撫でながら言った。

「そのご様子だとやはりご存知ないようですね。 御家族がおられるならお知らせしなければと思っただんですが、中村課長から広島生まれで、中国地方の山村で育ったと言うことだけは聞かされているのですが、それ以外は誰も知っている人がいないのです！」

「そうですか、わかりました。 話してくれるかどうかはわかりませんが、俺がそれとなく聞いて見ます。 警部補とは今話せますか？」

「いえ、今はちょっと無理ですねぇ。」

「そんなに様態が悪いのですか？」

「いえいえ、その逆です。点滴を終えて痛みが治まったとたん帰ると言つて聞かなかつたんですが、そこに青木雪乃婦警が来てくれて、宥めすかしてやつとおとなしくなつたほど今は元気ですよ！」

まあそれも薬が痛みを抑えてくれている間だけのことでしょうけど・・・しかし柘園さんは、誰が何と言つても苦虫をかみつぶしたような顔でまるで耳を持たなかつたのに、青木婦警の言葉にはやけに素直で、今は睡眠導入剤で眠っています。」

「そうですか、では明日の朝検査の前に少し話してみます！」

二人は互いに深々と頭を下げ、その場を後にしたのだった。

向井刑事が部屋を出た後、一枝は一人ベットで夢と現実の間で夢を見ていた・・・

田舎の村の神社の境内で10才くらいの子供が集まり、鬼ごっこをしている姿だ。

ほほを真つ赤にした女の子が顔をクシャクシャにして笑いながら大声で叫ぶ。

「あははっ！ こんどは一枝ちゃんが鬼だよ。」 と言うと、一枝は右手を大きく上に上げて 「みんな、境内から出たら出た人は負けだからね！」 と、大声で叫んだ。

「い〜ち・に〜い・さ〜ん・し〜い・・・」 一枝が松ノ木の陰で

目をふさぎ数え始めると、子供達は思い思いに身を隠す！　」  
きゅーう・じゅーう！　　もーういいかい！　」

一枝が目を開け叫ぶ・・・「もーういいよ！」　　あちらこちらから答える声が響く・・・

一枝は寺の境内を探して歩いた・・・縁の下を覗き、物置小屋を開けて見る。

1人見つける度に楽しげな笑い声が響く！

日が暮れるまで遊んだ・・・やがて、「かずえー！　　かえっておいでー」　　母の呼ぶ声が聞こえてくる！

その光景はかつて健二の体験した出来事だった。

眠っている一枝の顔に笑みがこぼれた。

健二の体験した様々な出来事が、まるで一枝自身の体験の如く置き換えられ、次から次へとつかんでは消えて行った！

どのくらい眠っただろう・・・目を覚ますと辺りは暗く、窓ガラスを通して明かりがまばらに灯ったマンションが見える！

一枝は思った。“なんで私は生身の身体にこだわったんだろう？”  
”私にはこんなすばらしい思い出があるのになぜあれほどまでに・・・”

一枝は考えた挙句、自分の中に眠っている健二に語りかけた  
“健二・・・健二・・・起きなさい！”

健二が目を覚ます・・・ “その声は一枝？ どうしたんだ？  
お ・ 俺は・・・？”

一枝は “健二・・・この身体、あなたに返すわ・・・私はあなたとともに生きてきたんだもの、たくさんの思い出があるんだもの・・・身体なんていらぬ・・・”

“ねえさん・・・もういいんだ！ もうこの身体は姉さんの物になつてる、今更もとは戻らないし、たとえ戻つたとしても俺は人殺しだ、このまま静かに眠らせてほしい。”

そついうと健二の声は聞こえなくなつた！

“まつて！ だめ、たとえ私がこの身体を支配したとしても、私は健二として罰せられるはず。 だったら健二、あなたはあなたとして罰を受け、あなたのままですかすみさんのところに行かないと・・・”

かすみと言つ名前を聞き、健二が再び現れた。

“かすみ・・・”

“そつよ、かすみさんは私じゃなく健二、あなたを待つてるのよ！”

“かすみ・・・かすみには会いたい・・・でも・・・”

“健二よく聞いて。 私はさつき刑事さんと担当医との話しを聞いてしまったの、その話ではもしあなたの罪が軽くなり死刑を免れたとしても、私たちの命は長くてもあと半年もたないのよ！”

“半年？”

“そうよ。私たちは結合双生児としてこの世に生を受けた。本来なら私たちは生まれてすぐ死ぬ宿命だったのよ！それがなぜか運命のいたずらで30年以上もこの世にいられたの、そのことに感謝しよう。”

“そんな・・・そんなことって・・・！！”

“健二！これから私はここを抜けだします、そしてかすみさんが飛び降りたビルまでなんとしたでもたどり着くわ・・・そうしたらあなたは私と入れ替わるの、健二に戻るのよ。かすみさんが心から愛した来栖健二に！”

頭の中の健二にそれだけ言うと、一枝はベットから飛び降りると窓を開けた。

ここは建物の端っこに位置するため、窓から上半身を乗り出すと左に鉄製の非常階段が見えていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6207o/>

---

新・大都会の夜（改正版）

2011年10月5日00時34分発行